

小田原史談

第 160 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2 -13-20

小田原今昔

本町界隈

相澤 榮 一

この写真は、集まっている人達の風俗から、漁師町に近い本町か宮ノ前辺りの南向の町並みのように思われる。板葺屋根で軽い感じの建物、軒下に掛けられた屋号入りの藍染めの細長い暖簾、屋号を墨書きした店先の障子戸、出窓の格子戸、店の側面に大時計の看板を出している時計屋さん、城下の宿場町の普通の商家の町並みを思わせるような明治中期の風景のようだ。この写真の時代とは、大分後ではあるが、私が小学校の一年生であった、大正三年頃の本町界隈の街の様相を思い出してみよう。

当時は、城内への出入口は昔のままで、城の正門であった鐘つき堂わきの大手門、箱根口、幸田門だけだった。第一小学校から隅屋敷との間には三の丸の土塁が松を茂らせて横たわっていた。明治三十年代に隅屋敷

の奥に栗原医院が開業した際に新道への私有道路を築いたので、本町、宮ノ前や海辺の街の人々は城内への近道として、その細い道を利用して来た。

箱根口から宮ノ前に通ずる土塁の南側の水濠は一間幅「約二・六m」の深い水路を南に残して埋め立てられ、殆ど家が立ち並んでいた。栗原さんの石積みみの路地の両側には濠を思わせるように蓮の枯れた茎が点在していた。

路地の右側に人力車業の小川さんの家があった。後年小田原中学で同級となった長男は卒業後、上京し公務員となったが、召集されて戦死された。左側にはトイレ衛生業の辻村さんの家、その並びに小学校で息子と同級生になった、洋食屋の廣田さん。その先で、父の小学校時代の同窓でその頃も懇意にしていた、杉本



さんが「いの字」という待合をやっていた。その先の宝玉という料亭はまだなかった。柏又さんは当時は山角町であった。

新道から本町への道の左の角に米屋の瀬戸さん、表通りの角に自転車

屋の瀬戸さん、その道の西側から表通りにかけての広い屋敷は、小田原でも有名な料亭の花菱さんであった。太った体、温厚な丸い笑顔、好人物型の主人公の岡田さんだったが企業

の厳しさに堪えられなかったようだ。

その先の茶屋の大津園さんは定かでない。その並びに江戸時代からの古い商家の三笠屋さんがあった。瀬戸自転車屋さんの東隣に床屋の伊勢谷さん。そばの喜久本さん、駿河銀行幸町支店、その先に臙気な記憶だがビリヤードがあって、その隣に門構えの料亭「福屋」さんがあったようだ。後年関東大震災後その料亭の女将だった太った美人は、ビリヤードの御主人の杉本さんと共に私の家の裏の旧町立高等女学校の跡の分譲地を求められ、其処でビリヤードを開いていた。実子がなかったので、部屋を借りていた新聞記者夫婦が養子となったが今は弁護士事務所になっている。

その料亭の先で萬町の鈴木英雄さんの従兄弟の鈴木英達さんが骨董屋をやっていた。その長女の千代さんは幼稚園で同級であった。又英達さんと父とは小学校の同窓でもあった。その隣の相沢時計屋さんの一人子の女の子も幼稚園の同級生であった。風月堂さん、高橋旅館さん、その隣に伊豆・戸田の方で、親切で御世辞のよい女主人がやっていた菓屋の楽天堂さん、下駄屋の大山屋さん、その隣に、角から新道まで黒塀で囲まれた、入母屋造り二階建ての小田原屈指の料亭、天利さんがあった。史談会が結成された当初から役員をされ、会の発展のために尽くされた、廣沢伊助さんはこの店の次男さんで、又古典芸能の通人でもあった。

電車通りの道向うの宮小路の角に洋品屋の翁屋さん、その隣に大勢の弟子を抱えていた、マッサージの高橋さん。翁屋さんの先に糸屋の高浜さん、菓子屋の井筒屋さん、その先の角に小田原銀行支店。

千度小路へ向かう道の東よりの角に行き李屋の今井さん、ご主人が第二小学校の先生をされ、テニスの選手で小田原庭球クラブのメンバーでもあった。その先に呉服屋の山田さん。この道は旧東海道故、その先に江戸期からの宿屋の清水旅館もあった。千度小路に行く道の西側に老舗の漁網商の角吉さん。丁字型の国道の突き当りにあった家の名が定かでない。その隣に足袋屋の老舗、葉屋屋さん。

代官町に行く道の角に菓子屋の集栄堂さん、その道の東側に質屋の関さんがあったようだ。その並びに鈴広さん、反対側に金子豆腐屋さん、国道の角が鈴松さん、その先に川瀬の酒屋さん、後年その店の五郎さんが小田原中学で私より三級上、弟の七郎さんが一級下であった。その先に梅干、塩辛の美濃屋さんの出店。その店の一人息子の湯川さんとは小田原中学で同級生となった。早稲田高等学院に入った彼が文学青年であったので共に文学運動をやった。後に離別したが幼馴染みであった英達さんの長女を恋人房にした。私の生涯の仲の良い友の一人であった。その先に洋月という小綺麗な洋菓子の店があった。商売に相応しいような美男

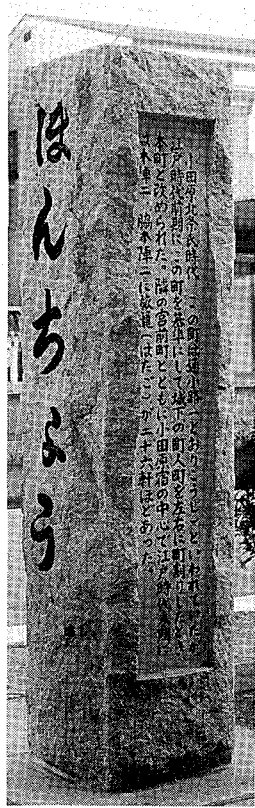
の主人公がいた。その隣り通りに末広という芸者屋があった。この家は湯本の母の実家の親戚である旅館と係わりがあったので、私は幼少の頃に母に連れられて伺った事もあった。今のオリオン座の処に矢張り映画の有楽館があった、細い路地の西よりに保生堂という薬屋さん、その隣が宿場時代からの老舗の旅館の小伊勢屋さん。主人公の尾崎亮司さんは、父の小学校時代の同窓で温友会という同窓会の会長をされていた。父が会計でした。その会の和式の厚い会計簿を私も大事に取っておいたが家の新築工事の際に失ってしまった。

保勝会や競馬場建設の創業時代も共に働いた父も、度々お邪魔したが尾崎さんもよく家にお見えになった。温顔に笑を湛えながら父と語りついていた尾崎さんが思い出の中に浮かんでくる。求信堂書店を開いておった当時父が頂いた二宮尊徳の本が私の蔵書の中に残っている。小伊勢屋さんの先に菓子屋の盛月堂さん、この辺りに宿場町時代からあったような間口の広い重厚な店構えの酒屋の老舗があった。升屋という屋号で太った旦那がいた。人力車業の永井さん、

代官町に入る道の西側の角に八百屋さんがあった。後年其処が勢国堂パン屋さんになった。松原神社の西側には国府津、湯本間を走る小田原電鉄の車庫や本社もあって、電車の小田原駅になっていた。京浜から箱根、熱海に行く客が乗り降りをしていたので宮ノ前や本町の商店街は何時も賑わっていた。その当時は旧東海道の面影が多少しのはれたが、今は一号国道として町並みと共に近代化され、その周辺は海辺に横たわる新道同様に車の騒音と排気ガスに汚染されている。

八十余年の歳月の流れ、明治末期から大正、この町の城郭は潰滅し昔を語る町並みの殆どが焦土と化した、あの十二年の関東大震災、昭和に入つて長い十五年戦争後の敗戦、米軍の占領、新憲法の施行、安保条約による基地化。国民の不断の努力による経済大国への成長。まさにこの国の激動期であった。

この本町界隈だけでも町並みも又其処に住まれた方々も変った。否定出来ない無常観が私の脳裡を去来する。人々の誰もがより良き現実を築くために懸命に生きている。



遺稿

露国・日露の役俘虜のこと

八十七年ぶりのお礼 前編(九)

文と絵

隠岐威重

露人の心

二 宗教について

ロシヤの宗教については今まで何も触れなかった。だが国の民としての民衆に、その統一の力、それが無形なるが故に逆に量り知れない力がある。歴史がその例を多く示している。

イエスが伝導に当たった紀元三十年前後、ローマではアウグストゥスとその後継者が無敵を誇る武力でその周辺の諸国を征服し、属州、従属国とし、地中海世界の覇権を確立した。ローマ人は属州民の犠牲で特権層、支配層となる。このような状況下で、イエスは伝導の対象として「苦しめる者」「うとまれる者」を救いの対象とした。無抵抗主義でローマに対して抵抗した。イエスは無抵抗のうちにローマ兵に捕らえられ、十字架刑で亡くなった。イエスの死は無抵抗の教

えの実践、殉教によって教えを完成したのだ。

ネロはローマの大火をキリスト教徒に擦り付け、キリスト教徒であることを処刑の対象にしたが、教徒の教えに対する熱意はさめず、かえって燃え上がっていった。

コンスタンティヌスは改宗し、リキニウスと共同でミラノで勅令により宗教の自由を保証した。三三〇年にコンスタンティノーブルに遷都し、異教徒の偶像に汚されぬ新しい地に聖堂を建てギリシャ正教の聖堂とした。「苦しめる者」と支配者との対立を本旨とすることから見れば、西ローマの教会内は批判勢力が強い。それは西方は社会が不健全で「苦しめる者」が多い、その批判力が清教主義、厳格主義の迫害期の理念が生き、後に発生する宗教改革の芽にもなった。東ローマでは宗教が帝国再編成の支えとして貢献し、支配力と

結びついた為に柔軟な進歩的な勢力とはならなかった。もっと時代が下がり西の

ローマの宗教は殆ど西欧を一時蔽ったが、ルターに代表される新教運動、神と個人の直接の契約の思想が個人の独立、権利義務の考えを生み、ビジネス、産業の発展を促し、世界を制する迄になっていった。

これに比し、東の教えは民衆と神との間を司る牧師があり、その牧師に全て懺悔する事で民の罪は免れた。牧師が全て責任を負い民は暢気な存在である。その暢気さの為に責任と云う觀念が生まれない。自らを律する気がなければ前進、自立は生まれぬ。そこに停滞が生じる事になる。残念なことにこの姿の教えがギリシャ正教、ロシヤ正教とにあり、停滞の元になる。教えの善悪より、教えに伴う個人の神への認識の差が実生活での発展と停滞を生ずる事は心すべき事だ。民が支える国家の盛衰に響くことを思えば大変なことになる。ともあれ、東方に位置する露国は東の停滞する教えを頂いた。国民の大半が、神を深く信ずる農民で作る露国

では、其の信仰故に停滞を意味するようになった。そして現在に至っている。

三 武器に対する信仰

さて、大砲、武器の話に転じよう。

宗教のような形而上の話は苦手だ。少しシンプルな話にしよう。武器について北の民族の過信について：

ロシヤ平原の民達は「タールのくびき」以前、蒙古系の、トルコ系遊牧の騎馬隊、その剛弓のもとに為す術もなく敗れ、永いこと、其の酷政の下に喘いだ。喘ぎながら、悶えながら、平原の人達はその対抗策を建てていった。自力でなく西欧の考えを借りて。中国に発し、オリエント地方を東に回り西欧に来て発達した火薬による武器、小銃、大砲に思いついた。

その火薬を使い、シベリヤにバートル海地方に、点在する汗国と称する遊牧の民の包強兵を倒す事が出来、また、小銃の爆音で彼らが頼る強馬を驚かし、散ずる事が出来た。

一時代前、あんなに悩まされた剛弓と強馬に守られた遊牧の民を嘘のように破

ることが出来た。ロシヤ平原の民はこの新兵器に頼る寄せ、接吻して喜んだ。新しい兵器とは、こんなに威力があるものか、と崇め信じ入った。骨の髄まで信じ入った。

鉄砲の親分大砲に至っては其の威力は倍加し、戦果は量り知れないものになった。狡猾で勇敢なアウトローの民コザックを巧みに利用し、彼らに小銃と大砲を与え、シベリアに放してみると、僅か半世紀の間に瞬く間に荒野を平らげて行き、おまけに、走る宝石黒貂毛で大量に献じて来た。前にも記したが、カムチャッカ半島は百人に足りないコザックの小部隊と僅か四門の大砲で数年の間に我が国の倍も広い地を平定した。そして、その半島の港の裏の小村に小部隊を駐屯させ、毎日砲を引き出し、操作し、終わると磨き上げ接吻して格納する様を、高田屋嘉兵衛が囚われの身に驚きの眼で見たと誌した。

その大砲で何処を守るのか、無人の、凍土の荒野を何処から敵が攻めてくるのか、と嘉兵衛が眺め回していたのは面白い。当時の我

が北辺の地には大砲一門すらなかったのだ。

ずっと近代になり、日本が中国東北を侵し満州国を作った頃、北支の北にある熱河地方を平げたのは北方諸君より一息ついた後になった。

関東軍は当時としては、斬新な機動力を使うことを思いついた。トラック、それが引く野砲、小さな戦車と、当時としては珍しい機械力で臨んだ。そしてその作戦は成功した。旬日もたたぬうちに、全熱河省を掌中に収めた。

その戦果を西欧のドイツ・ソ連が注目していた。武官を派遣して、その作戦、兵器を研究した。ドイツの武官の名は忘れたが、ソ連は後のジューコフ元帥(当時少将)を派遣して学ばせた。そして、その数年後、ジューコフと関東軍はノモンハンで戦った。ソ蒙軍の完勝だった。小松原師団は壊滅した。十二分に装備したソ蒙軍の前には殆ど装備らしい装備もない軽装の小師団は吹き飛ばされた。関東軍幹部の石原、辻あたりの驕りの姿と、過剰なまでの重装備と数量に守られたソ連との差が浮び上がる。また驚く程のソ連

の砲撃の正確さを聞く。関東軍の砲は敵陣を漠然と打つが、ソ連の砲は我が砲一つ一つを正確に打ち落とし、愛情と訓練の深さが窺える。

又その後、第二次大戦で、同じ熱河で共に学んだ独ソの機動部隊の死闘があった。初戦は独軍の一方的な勝利だったが、冬の到来と共にジューコフは敢闘し、遂に大勝を得た。実は、戦後に知った話だが、満鉄の調査部では独ソ戦の結果を予測していた。ソ軍の勝ちと、初戦は独軍は勝つだろうが、

戦いが長引けば負けと。独軍には長期にわたる石油の補給計画がなかったのだ。近東、黒海沿いの油田が確保できれば別だが、それも叶わず、独軍は油不足で敗れ去ったのだ。世に云う冬將軍の力だけではなかったようだ。これも備え、広い意味でのその差が、明暗を分けたのだ。その結果露国は益々過剰装備、その過信に走っていった。大戦後の米ソの冷戦の話はソソップ物語めく。軍拡合戦、原爆水爆、その製造の秘密を盗んだ、盗まれたは別として、その軍拡、毎年重なる

軍備費の重みで国の財政破綻が国政を腰砕けにしてしまった図は、今、現在のことだ。笑えぬ話だ。米国より北の巨人の方が重傷だとも云えるが。如何。

ここまで、露国のことをウダウダ話してきたが、何れは他人のこと、他国のことだ。余計なお節介だ。だが、隣同志、狭い海、大陸から下る半島の直ぐ下に小さな列島が並んでいる。その場所は変えられぬ。勝手に変えられぬ宿命がある。過去も、現在も、未来も。互いにそんな場所にいる。

ここで、少し、趣向を変えて願望について考えてみよう。これは老人の独断と偏見だとは思えるが、でも常々考えていることなのだ。欲望は大体本能と同意語だと思っている。本能と云う奴は中々制御しかねる。まして欲望と云う少し品の落ちる奴は、なお中々退治し兼ねるようだ。だから、欲望・本能の隣合わせで商売をすれば大儲けができる。あるきわどい商売は禁止されているが、それ以外の物は国管か、それに準ずるやり方で税金をガッポリ国庫に放りこんでいる様を見れば

ば理解出来るだろう。欲望即ち本能即ち楽をする……に通ずる方程式だと考えている。本能即楽はいささか説明を要するが……、人間は生来怠惰なもので、楽をする

こと、たとえば、物を持つ時重い物より軽い物を好む。同類をあげると寒いより暖かい方がいい。飢えるより食える方がいい。苦しい労働より楽しい行為の方がいい等々。善とか悪とかは別としても少し形而下の世界では大体そんなものだと思っている。また、和辻哲郎の考え方から、大陸の荒々しい気候風土の中に育ち培われた人たちの欲望は、我々のように湿っぽい空気の中の者より強烈で濃度が濃くしつこいよう

だ。欲の現実に掛ける様の濃淡だけでなく、あらゆる行為にわたっても油こく、しつこい。我々が淡白過ぎるのかも知れぬ。彼等が乳を飲み、我々は味噌汁を飲む、差かとも思うが、少し怪しい。さて「タートルのくびき(頸木)」の跡が彼等の首筋に深く残るように、深い猜疑心と、その頸の痛みが一時軟らく時に生まれる野放

図な楽天性が爆発する狂気を示す。その狂気が武器を過信し、前面に押し出し、潜在的な征服欲が生まれる。

専制帝が生まれ、その制度が四五百年も変わらなかった。専制皇帝、それを取り巻く僅かな貴族、その下には農民と農奴しかいない制度、その制度が殆ど揺るぎなく五百年も続いたのだ。欧州としては珍しい現象だ。その間、西欧では国と国との争い、その大体は宗教

が大きな根をなしている。その宗教の争いが思想を発展させ、国力、文化を飛躍的に発展させた。それに引き替え、この北の地露国では、教えは同じキリストではあるが、宗教と国政が癒着して発足した為、国政の安定はあるが、教義の上の争いも殆ど生まれず社会の発展にも繋がらなかった。これがロマノフ王朝の五百年継続にも繋がった。しかし、科学も文化も自主的には興らず、絶えず西欧の文化を遠くから眺め、羨望し、大金を投じてそれを求め、手垢の付くまで撫で回していた。

それが少し時代遅れの、文化が原形の儘破片として残り輝く、こんな時代に、こんな所にと、後世に不思議な姿を呈する。

例えば、レンブラントのやに絵から、印象派から近代絵画までが、いかに多数モスクワ・レーニングラード辺に貯蔵されているか、を聞く。

絶対専制政治から社会的不満が爆発して社会主義國家に一足飛びに飛躍する。その不連続性、途中民主的な資本の時代を飛び越していく。マルクスさえ予言しない道を辿る。その突飛さ何かロシア風の駁雑性を示している。



でも、変わらぬ物がある。

國を興して五世紀も続いた専制。革命前はこの國の人口は六千五百万だったとか。その一%が貴族、残りは農民、農奴だった。殆ど全國民が虫けら同様の者達だったのだ。農民、農奴の生奪の権は貴族、もっと云えば皇帝が握っていた。革命後、それは党を支配する一人の者が持っていた。皇帝と党の支配者、貴族と黨員に置き換えれば分りやすい。

いま、沢地久枝氏の「私のシベリヤ物語」を面白く読んでいます。

菅季治なる哲学の徒、その戦争への召集、渡満、敗戦、捕虜、抑留生活、帰国後の困難・自殺、……

露國のニコライ一世即位

の日、十二月十四日、貴族將校を中心とし、専制を立憲制に指向し、反乱を起こした。十二月をロシア式に読むと、デカブリ。英語ならデッセンバーか、その

デカブリの時代も、太平洋戦の日本の捕虜も何も変わっていないと受け取っているようだ。時の政權が必要とすればそれに反する者も、捕虜もその必要に応じて酷使する姿だ。だが、捕虜の酷使はその時だけでは

ない。戦いで囚われた者は殆どシベリアに送られる。シベリアは捕虜、囚人……ソルジエニーツインが誌す現在の囚人も……その弱き者達によって開かれる事が露國の國是、政權としての常識、常道、定石になっているのだ。

これを、咎める良心なぞ麻痺し無いに等しい。

軽躁な狂人に近いヒットラーが西欧中央に旋風を起こし、第一次大戦後の秩序を自國本位に、自分本位に巻き返した。英國、フランスと戦場で対峙する時には、一時の都合でその背後独ソ間で平和不可侵条約を、

反共國と共產國の垣を越えて締結した。老人は当時大學生だったのでよく覚えて

いる。平沼騏一郎とか云う法曹界出の内務官僚が首相の時だった。「複雑怪奇」とか、当時の目まぐるしい

世界情勢について行けず内閣を投げ出してしまった。その後、我が國は、坂を転げ落ちるように、敗戦の谷に向かつて走り出したのだ。

我が國が不利な坂を転がり落ちて行く様とは別に、毎日の新聞は楽しみだった。ヒットラー、スターリン、ルーズベルト・後にトルーマン、チャーチル、蔣介石大物役者が世界を舞台上に、舞い、回り、演じ合った。壯観と云う外無い。舞台をはみ出す大演技だ。誇張ではない。ムッソリーニは三枚目、近衛・東条は二流の端役者だった。

テレビはまだ無い。新聞の伝送写真、映画館で映すニュース映画、白黒の縞がチラチラする画面が実在感を与える。大きな鼻の下の髭、その下の分厚い唇が僅かに綻び微かに笑う。目尻の皺も笑う、だが、瞳だけは冷酷に狡猾に光っている。これがスターリンだ。ブル

ドックのように皺の多い顔、口元の皺は不屈の意志を示す。だが、弛んだ臉の中には青年の光があるチャーチルだ。大店の主人然としたルーズベルト、子どもに何か万引きされぬかと、病後の顔を油断なく巡らす。ヤルタ会談の寸景だ。こんな場所、こんな登場人物で、日本の戦後の処理が決まったのだ。

いつ迄タラタラ記しても切りがない、ロシアについては中々判らない。分析しても分らない。でも大まかでも、過去にあったこと、特出すべき、特記すべき事柄、置かれた位置、頂く宗教、等々並べてみると少しは分かる。詩を、音楽を、舞踊等、抽象の世界を特に愛する心情、と、同時に北の風土が生む熱っこい重厚な文学、糞リアリズムの絵画と反する芸術も生む。よく分らない。でも並べ上げてゆくと、その事項、事項に少しは領ける分もある。それでいいんだろう。大体、大ロシアの民族その心情など、一小文で語り上げる事自体無理なことだ。身の程を知れ……だ。これで満足しよう。

(続)

小田原叢談(三)

石井富之助

小田原の桜

「暑さ寒さも彼岸まで」ということばのとおり、彼岸がすぎると急に身辺が明るくなり、風の感触もやわらかくなって、いよいよ春である。

城址公園の桜の満開はだいたい四月の上旬であるが、これにあわせて桜祭りが行われる。城址の桜はほとんどが染井吉野で、およそ八百本ぐらいあるそうである。首都圏には天守閣のある花の風景などほかでは見られないものであるし、小田原から箱根という日帰りコースは京浜の人々にとって、自分の庭でも歩くような気軽さがあるのである。桜祭りはそういう人も吸収して相当なにごわいを見せ、観光行事としてすっかり板についてきた感がある。

活を送った。桜ともずいぶん古いつきあいである。が、堀端の桜についての記憶はさらに古い。子供のころ、城址一帯は御用邸であったから、その内部の様子についてはなんら知るところはないが、弁財天通りから堀端、三の丸小学校前にかけてずっと桜が植えられていた。まだそれほど大きい木はなかったように覚えている。その花の下を第一小学校(今の三の丸小学校)へかよったのである。それから推してみて、堀端に桜が植えられたのはどうも明治の末ごろであったろうと思う。それについて何か記録がないかと探したら、これも片岡永左衛門氏が書いておいてくれた。それによると、桜の苗木を寄付したのは辻村常助氏で、弁財天通りから堀端に

多数植えつけたとある。そのころの弁財天は堀に続いてかなり広い池になっていた。ところどころ底が見え、じくじくしていて湿地といった方がよいのかも知れない。まんなかに島があって、そこに弁天さんの小さいほこらがあった。今旭丘高校と野球場の間にあるのがそれである。通りの北側には宮内大臣をやった一木喜徳郎氏や片岡さんの居宅があった。弁財天通りという名は通称であるが、桜が植えられてからここを桜小路と私称したと、片岡さんはいっている。当時は駅前広場のあさひの前から城山中学校



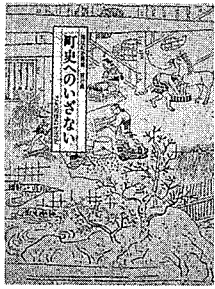
カット 内田美枝子

の北側の崖下まで細い道路が通じていて、揚土といいた。この道から青橋、さらには八幡山東斜面にかけて広大な農園があった。辻村農園といい、辻村常助氏はその経営者であったのである。これで寄付した人はわかっただが、植樹年代については片岡さんもはっきり書いていない。

年が経ちこの桜が大きくなるにつれて花見客も次第に増えてきた。そこで小田原保勝会は樹間にぼんぼりをつけて夜桜見物ができるようにしようと考えた。この記録はちゃんとする。

かつて本会員たる辻村

常助氏の篤志に基づき植え付けた外堀端の桜樹もようやく春行楽の人を呼ぶに足るに至ったので、一層遊覧客招致の目的で大正八年より夜間多数ぼんぼりの電灯をつける等それらの観桜設備をする。これはただ樹間にぼんぼりをつけただけではなかった。多分保勝会が大いにあつせんをしたのであろう。道の東側には露店商人が色とりどりの店をひろげ、その上いつごろからであったか、一流料亭までがお茶屋を出した。女中さんは赤いすきに赤い前掛姿、芸妓連も思い思いの店に暇を見ては手伝いにきていたようである。それが思いのほか人気を呼んでなかなかぎわったものである。しかし、どうもぼんぼりだけでは光りが十分にとどかない。もっと明るくしなければということ、その翌年か翌々年かには三、四か所に照明灯を取りつけ、花を上から照らして夜空に浮きあがらすという工夫もされた。当時としては派手なことをやったもので、けだし小田原の桜祭りのはしりといつてよ



町史のいざない
本書は、開成町史編集委員長の著者が町史編纂に当たって町民の理解と協力を得るため、毎月一回町の広報紙に五年間に亘り執筆してきたものをまとめたもの。

延沢 七三
A6判 一五九頁 価千円

開成町史叢書 第2集
町史へのいざない

著者 瀬戸 崎雄
編集・発行 開成町庶務課
課町史編さん係

ご先祖様の生活史

新刊紹介

開成町史叢書 第2集

◇町史へのいざない

いであろう。この時の絵葉書がたしか三、四枚図書館に保存されている。
ところが、関東大震災で道路が堀に崩れ込んだり、まんなかに地割れが入ったりしたため、この桜も被害を受け枯死するものが相当に出た。それで弁財天の桜

を移し植え城の正面の姿を整えたのだと片岡さんはいっている。昭和に入って御用邸を含めた地域が水の公園として整備されるようになると、二の丸、本丸、その他周辺にも増植、補植が行われ、これが基になって現在城址公園の桜とたたえら

れるまでになったのである。西海子の桜も堀端と同じくらい古く、別荘地であったこの付近一帯にそれらしい風情をただよわしていた。井上崇氏の談によると、大正四年の御大典記念事業として山角町の青年会誠友会がこの植樹をとりあげ、

◇一句一景

著者 高田 掬泉
発行

高田 掬泉
A6判 二五頁 価千円

内容は、江戸時代を中心として明治の初め迄の開成町の旧村々で起きた出来事の中から正史に載らない出来事、載せかねる出来事を中心に庶民の生活を主にした六十八話から成っている。非常に判り易く、親しみ易い。どのページの話から読み出しても差し支えない読み物である。

「楽しからずや四季のうつろい」と、サブタイトルをつけたこの本。俳人の著者が、一昨年の夏からまる一年かけて、『神静民報』に連載したものを、ここに一冊として発行したものである。句集の中には、ただ句を羅列したものが多く、ものによっては退屈する場面がある。句が主観的な内容となると、その意味を汲みとることに難渋する。

話は、町内外の古文書によっており、創作は一切含まれていない。書名が「町史へのいざない」となっているが、開成町の旧村々にとどまらず、小田原藩領に関連ある内容であり、更には登場する村々を相模国や他の国々に置きかえても少しもおかしくない。

しかし、掬泉氏は、六十

なお、本書は、小田原市内では、伊勢治書店、八小堂書店、平井書店で販売されている。

高田掬泉の句集



松岡彰吉氏の盡力によって行われたということである。最近とみに注目を浴び、訪れる人の多くなったものに長興山紹太寺のしだれ桜がある。高さ約十四メートル、目通りの周囲が二百六十五センチもあるという巨木で、天然記念物に指定されている。紹太寺は稲葉家の菩提寺で、すぐそばに春日局ほか稲葉家一族の墓がある。この辺一帯を整備すれば小田原市の一つの名所となり、しだれ桜も一層見栄えのする存在となるにちがいないと思う。

子を買っている。子供のころ緑新道に山田という菓子屋があり、その店に並んでいたのとまったく同じものなので、山田さんに聞いてみたら、「あそここのだけは今でも作って出しているんですよ。」といった。うれしい話である。

しだれ桜といえば早川の観音堂脇にも大木があったが、樹形から見て老木は枯死し、現在ののは二代目だろうと片岡さんはいった。それからまた四十年以上も経っているのだから、一冊であっても馬鹿にならない。観音堂を管理している真福寺の境内にあると聞いた。これはあまり知られていない。わたしはまだ見ていないので一度訪ねて見ようと思っている。

もう一つ、わたくしごとになるが、報徳二宮神社に一本の老木がある。あれはあなたの祖父の石井伊兵衛さんが植えたものだよと片岡さんが教えてくれた。祖父は福住正兄氏などと神社の建設委員をしていたので、あるいはそんなことがあったのかも知れない。とすると、この桜を植えたのは神社の創建された明治二十七年(八齒)か、遅くも明治三十年代のことで、小田原の桜の中でも古いものの一つといつてよいであろう。

ここに書いた桜以外にまだ方々にそれぞれいわれのある桜があるであろう。こうしてふりかえてみると、そのどれにも先人の心がこめられていて、あだやおろそかにはできない思いがする。

余年の永い句歴だけあって洗練されており、また、門外漢にも句の意味がよく判る。それに、「一句一景」とに爽やかな文章が添えられ背景をくっきりさせ、読むのを一層楽しくさせてくれる。更に、今回発行されるに当たって全部新たに書き直した、一句ごとの俳画は、句と文に潤いを与えて

くれる。

万骨のかけらと生きて

敗戦日

この書に収められた一句であるが、一兵士として北支戦線で敗戦を迎えた作者が、さらっとした表現で自分を融け込み流し去っているのには、改めて感心させられる。

◇神奈川の歌をたずねて

著者 奥村美恵子

発行 神奈川新聞社

発売 かなしん出版

A3 文と写真 五二頁
県内主要 三四頁
書店で販売 価二千円

誰しも知る心に残る懐かしい童謡や唱歌のうち、神奈川にゆかりのある曲を収めている。

京都に在住。

二十数曲から選んだ二十曲のうち、「鎌倉」「城ヶ島の雨」「箱根八里」などは、その題名からして神奈川と縁のある歌であるとすぐ判るが、歌は知られていてもゆかりある曲だと知られていないものもある。

著者の奥村さんが神奈川県にゆかりのある歌について関心を持ち始めたのは、数年前「めだかの学校」が小田原で生まれたのを知ってからであると云う。

著者は、

幼時の音楽教育が専門で、定年迄は小田原女子短大教授。現在は横浜女子短大非常勤講師として勤め東

生涯で約千二百編の童謡を生んだ北原白秋の作品のうち、その半数近くが小田原時代に作られており、そのうち、小田原に縁のある三曲が収録されている。

また、小田原で生まれた白秋の長男隆一郎さんが寄せた「小田原時代の父白秋」の文も載っている。奥村さんは、この著を出すに当たって、一年半もかけて、舞台となった場所へ何回も足を運び、また関係者から話を聞くなどして取材し、曲ごとに歌の背景やエピソードそれに風景カラー写真を載せており、眺めるだけでも楽しいものとなっている。また、ピアノ伴奏付の楽譜が収められている。



古文書講座 11

紺屋組合改革掟写し

内田 清

京紺屋津田藤兵衛

初代津田藤兵衛は『新編相模国風土記稿』によると、北条早雲より板橋に屋敷を与えられて染工になり、上京して朝廷の染物を行って京紺屋の屋号を賜ったと伝承しています。

藍染物が庶民衣料の基本だった江戸時代には紺屋が各地に発生しました。藤兵衛家は小田原藩城付き四万石の紺屋頭を世襲し、藍瓶銭を徴収していました。

しかし、幕府による天保十二年(一八四一)の株仲間解散令、嘉永四年

どによる新紺屋の開瓶(開業)認可

事件が発生し、仲間一同の訴えを受けた大行事小市村(南足柄市) 忠左衛門の働き掛けで、以下のような改革が「掟」として行われます。

鑑札制による組合掟

写真版は、十か条中の第二条(2)と後書部分だけです。

掟は先ず①免状を回収して藩印を捺した鑑札を出し、冥加銀の年々上納と、⑤の休業中も上納継続で藩の収入をふやす。

次に②弟子の新規開業は最寄り

(近隣)の紺屋仲間との話合いが整ってから、重立ち(代表)者より大行事、村役人、紺屋頭へと手続きする、旅職人は不採用と明示し、③素人の開業もより厳しく規制し、事実上新規開業が出来なくなりました。その上⑥廃業による鑑札譲渡も禁止して、紺屋数の減少を計った。

第三には⑦⑨で組合の嚴重、集会参加を確認して組織を強化し、④で勝手な賃上げ(下げ)も禁止した。

第四は養子の子で若い紺屋頭の権威と収入を⑩⑤で保障した。

紺屋組合の組織

以上のように旧株の紺屋保護を主として藩・紺屋頭にも配慮しながら、幕府法をも無視した保守的な改革だったのです(『南足柄市史』1-230参照)。

天保期に足柄両郡で二十二軒の在村紺屋は東・上・土肥の三組と五人の行事が紺屋頭を頂いて組合を作っていました(『南足柄市史』1-236)。

慶応期には大行事と郡中大世話役を設けるなど組織強化が図られているらしい事も、この史料の省略部分か

から読み取ることが出来ず。
尚、当史料は綺麗な文字で書かれ、
一同の連印が省略され、郡中大世話
役だった生沼啓治家に所蔵されてい

る事から、掟の原本や下書きで無く
「写し」と見られます。
注意して欲しい語句

① (前略)

②
一 女子年季明^ニ職業相始申度節^考、住
所最奇之仲間一同^ニ示談相整、双方故
障無^レ之上者、重立候者より大行事迄
申立貫、其上^A所役人奥印之書面^ヲ以
御頭^B願立、御鑑札頂戴之上、開瓶可^レ
仕候事

但旅職人等取持候儀、一切仕間敷事。

~~~~~ (中略) ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩ ~~~~~

右拾ケ條之趣、堅相守、聊たり共違背仕間  
敷、万<sup>一</sup>右ケ條相背之者御座候節、如何様  
御咎<sup>ヲ</sup>蒙<sup>リ</sup>候共、毛頭御恨無<sup>ニ</sup>御座候。依<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>  
同連印奉<sup>ニ</sup>差上<sup>一</sup>候。為<sup>ニ</sup>後日<sup>一</sup>仍<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>件。

仲間 慶應元乙丑年八月

津田藤兵衛様

大行事

忠左衛門殿

A 新役人奥印

ところやくにんおくいん

所役人は住所地の村役人。奥印は  
事実を証明するために文書の終わり  
の部分に捺す印鑑。

B 温札取裁

かんざつちようだい  
鑑札は免許証として与えられる木

札。頂戴では文字のへんとつくりの  
略し方をなぞって身につけて下さい。

C 大行事

忠左衛門殿

おおぎようじちゆうざえもんどの  
江戸時代の行事は商人や町内の組  
合で、組合を代表して事務を行った  
人。この場合の大行事は幹事長のよ  
うな役。殿と様に注意、江戸時代は  
武士・役人など身分の高い人に「様」  
を付けました。

~~~~~ 前略 ~~~~~

一 弟子年季明^ニ職業相始申度節^考、住
所最奇之仲間一同^ニ示談相整、双方故

障無^レ之上者、重立候者より大行事迄
申立貫、其上^A所役人奥印之書面^ヲ以

御頭^B願立、御鑑札頂戴之上、開瓶可^レ
仕候事。

但旅職人等取持候儀、一切仕間敷事。

~~~~~ 中略 ~~~~~

右拾ケ條之趣、堅相守、聊たり共違背仕間  
敷、万<sup>一</sup>右ケ條相背之者御座候節、如何様

御咎<sup>ヲ</sup>蒙<sup>リ</sup>候共、毛頭御恨無<sup>ニ</sup>御座候。依<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>  
同連印奉<sup>ニ</sup>差上<sup>一</sup>候。為<sup>ニ</sup>後日<sup>一</sup>仍<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>件。

仲間 慶應元乙丑年八月

津田藤兵衛様

大行事

忠左衛門殿

忠左衛門殿

# 大久保忠良 徳大寺照子

## 縁組覚書 (2)

小野意雄

### 目次

- 一 はじめに
- 二 資料について
- 三 ご縁組み
- (1)ご縁戚
- (2)家臣への申達
- (3)続く慶事
- (4)慶事と小田原の動向
- (5)官許の縁組み(以上前号)
- (6)破談に終わった縁組み

### 四 忠良公の事績

- (1)略歴
- (2)忠良公隠居
- 忠禮公再相統
- 関係文書抄録
- (3)教導団入学関係文書目録
- (4)「餘綾之夜話」抄録(以上本号)
- (5)明治八年
- (6)忠禮公「御自書日記(抄)」から

### 五 徳大寺公純女

- (1)徳大徳寺家家譜抄
- (2)大洲の加藤家
- (3)阿部家家譜抄
- (4)両敬関係の修復
- (5)公純卿と實則卿

### (6)破談に終わった縁組み

さて、以上の資料で、忠良公と徳大寺公純女との縁組が太政官裁許の



大久保忠良公

もっと早く起こって  
いたであろうこと  
大正八年の田中光頭  
伯の建白ないし昭和三  
年の小田原有信会によ  
る請願、その結果が  
「子爵」のママとい  
うことはなかったか

下で整ったことは  
判ったのですが、  
1 公純女とは、どなたなのか、何  
姫なのかは明記されていないので判  
りません。  
2 婚儀が滞りなく進み、お輿入れ  
が何時あったのか。事は、内縁関係  
で終ってしまったのか。それは忠良  
公戦死による解消か、それとも戦死  
以前の破談だったのか。  
1 の設問に答えられる、明記さ  
れた資料に今回接することはできま  
せんでしたが、第六子の照子姫であ  
ると、ほぼ推定できたと思います。  
最後の章で、関係資料に当ることと  
します。

2 の設問についてですが、お輿  
入れはなく、徳大寺殿からの申し入  
れにより、明治八年五月二十二日破  
談の協議が整い、破縁になった記録  
がありました。そして官への手続き  
もとられたようです。

私は、徳大寺公純女との縁組みを  
知った時、一つのショックを覚えま  
した。それはもし、忠良公に問題が  
なく、ご成婚・新生活と円滑な流れ  
が続いたならば少なくとも、明治十  
七年の子爵叙爵に係わる陸軍運動は

も知れないこと。あるいはまた、小  
田原の殿様を「バカ殿様」呼ばわり  
してはばからない昨今の風潮は起こ  
らなかったであろうこと。そして小  
田原のイメージ・性格も、もう少し  
違った創られ方をし、描かれ方をし  
たかも知れないと思ったのでした。  
参考の一助として、最後の小節で  
「公純卿と實則卿」父子の事績を紹  
介したいと思います。

### 四 忠良公の事績 (抄)

つぎに◇『史蹟調査報告第三』

「三 大久保忠良」の27、37頁を転  
載して、忠良公の略歴・性情等を追っ  
てみたいと思います。

(小見出しは小野)

#### (1) 略 歴

大久保忠良公の事績は、近世小田  
原史稿本下巻第五編第二章に収録編  
纂して置いたが、稿了後幾多の史料  
を発見したから、左に追録すると共  
に其略歴を登載することにした。

公は、小田原城主大久保氏十三代の  
主人公、大久保忠禮養子、大久保中  
務少輔教義(旧荻野藩主)の長男、

母は加納遠江守久壽の女、安政四年  
五月五日江戸藩邸(麻布市兵衛町)  
に生る、幼名岩丸、家族在所(荻野  
山中)へ御引移御住居、明治戊辰の  
国難に際し、官の内命にて入りて宗  
家を襲ひ、小田原城主となり、七万  
五千石を賜はる、時に明治元年十月  
二日、齡僅かに十二才、同年同月八  
日忠良と改名、同二年六月任相模守  
叙従五位下小田原藩知事被仰付、同  
四年七月廢藩置県制実施免本官、同  
年九月奉 朝命移住東京、同八年病  
の故を以て隠居し、同九年一月陸軍  
教導団入学、同十年三月九日任陸軍  
伍長被命征討軍附出征す、同年同月  
二十九日、肥後国山本郡木留口平野  
村に於て戦死す、享年二十有一、木  
葉山麓官軍埋葬地に葬り遺髪を教学  
院(東京)に葬る、明治十年十一月  
十四日別格官幣靖国神社に合祭せら  
る、大久保忠良命と称す

これが公の略歴である。

#### (2) 忠良公隠居

忠禮公再相統  
関係文書抄録

#### ○ 第二大区三小区

|        |     |       |
|--------|-----|-------|
| 華族     | 従五位 | 大久保忠良 |
| 養父     | 従五位 | 大久保忠禮 |
| 明治八年六月 |     |       |
| 十七年二月  |     |       |
| 明治八年六月 |     |       |
| 三十二年八月 |     |       |

私儀

性質虚弱にして胃腸の平和を失し候に付下医師美濃部宗節へ治療相托し置候処冬以来脳膜炎の症状を為し別紙診断書の如此俟在再歳月を歴候も奉恐入候に付隠居仕養父忠禮壮年にも有之候間再相統被仰付候様仕度此段奉願候以上

明治八年六月二十九日

第二大区三小区

華族 從五位 大久保忠良

養父 從五位 大久保忠禮

第二大区六小区

華族親類惣代

忠良 從五位 大久保教義

実父 東京府知事大久保一翁殿

再相統被 仰付候事

從五位 大久保忠禮

明治八年七月七日

再相統被 仰付候事

明治八年七月七日

太政官

從五位 大久保忠良

隱居被

間食候事

明治八年七月七日

太政官

附記

御検査済之上明治九年一月二十一日御入団相成候事(朱書なり)

これが公、隠居願関係文書の抄録である但美濃部医師診断書写なし。

(3) 教導団入学関係文書抄録

教導入学願

生国 武蔵国豊島郡第二大工区

麻布市兵衛町一丁目産

宿所 第二大区三小区芝浜松町

二丁目二十八番地

東京府華族從五位大久保忠禮

養子隠居第十六区一小区下谷

金杉村三百二十一番地寓居

從五位 大久保忠良

明治八年八月

十八年四月

右之者之今般教導団へ入学奉願候間御検査之上御採用被下度固より入団之上者御規則嚴重に為相守申且又当人身上之儀何事に不依私共引受可申依之此段奉願候 以上

身元引受人

東京府華族

第十六区一小区下谷金杉村

三百二十番地

從五位 加納久宣

第二大区六小区麻布市兵衛

町二丁目芝源助町十七番地

寓居

從五位 一石川総管

教導団御中

附記

御検査済之上明治九年一月二十一日御入団相成候事(朱書なり)

これが公教導団入学関係文書の抄録である。

(4) 「餘綾之夜話」抄録

◇然るに世子(公を指す)此頃は昔日の世子ならずと聞き余は三事を建議す、曰く

一、西遊して西郷氏の私学校に遊学す(庄内の酒井氏既に同地に遊学) 二、静岡の人見氏の私塾に入る

三、山岡鉄舟先生に師事す

以上は余官を罷めて陪從せんと計畫す

然るに忠禮公余を召され、其三

山岡先生への紹介を囑託せらる、直ちに奉命して世子と同車し、山岡先生

の四谷の寓居を訪ひ、此事を懇請せしに、先生言う、華族の青年を教

育すると言ふ事は、重大にして容易ならずと雖も、御依頼も黙止し難し

乍不及御引受御相談致すべし、之れ

よりは度々御出可有之、又徳川宗家の

の龜之助様(家達公)には、御同齡

にも有之のみならず、御旧誼も浅からざる御家柄に付、御同家へも御同

伴致し同御師傳にも依頼すべしとの

事に有之、仍て将来を精々頼み置き、

其旨を復命せしに、忠禮公には非常

なる御喜悅に被為在、特別之御懇遇

を蒙り帰国せり……然るに世子の御

本性は一朝にして御移善之途なく、

又故との懶情に戻らせられ、山岡先

生にも疎遠になり、徳川家へも御立

入無之云々

◇余以為らく世子の戸主たるや、国

難に際し官の内命にて、未藩の荻野

山中より入りて御相統ありし者にて、

普通の養嗣子とは別段なるを、自家

教育不良を以って生じたる此事にて

退隠せしめ、返籍す事とは、下等社

会に於いても忍びざる所、況はんや

華族に於てをやと思考し、直ちに中

垣翁と協議し再度門閥古老を説き小

田原の輿論を確定し、余又上京して

忠禮公を御諫め申し、其返籍を止め、

単に御一身を御実家へ御依託ありて

教育せしめ云々

◇三月八日御家政制定成立の為めに

祝宴あり、仍て公及岡本、大野、神

原、黒柳、大久保余と、芝山内某写

真師に托し撮影を為せり、偶々前世

子教導団伍長を以て出征を命ぜられ

たりとて御暇乞として参邸せり、一

同歡喜して杯を献ず、余も又杯を奉

げて其健康を祝し、祖先の御武勲を

述べて懽とせり、時に新金貨百枚

太夫人御手製の胴巻に入れ進呈あり

き、此新金貨は非常準備として、鎗

田をして第一国立銀行より替へさせ

たる也、其後余は帰国して徴兵巡查

の件に従事し、東西に奔走し、三月

二十九日前世子の肥後国木留口に於

て戦没の報に接し、又上京して弔墓

之志を立て、從軍を願ひしも果たさ

ずして帰国す云々

◇之れは「餘綾之夜話」関氏隨筆関

係の抄録である。

※私註 右文中の「太夫人」とは忠修

夫人(御祖母様 淨心院様)、そして

「余」は元家老の大久保貫一(弥右衛門

雅案介)です。

# 震災日記

## 片岡永左衛門

大正十二年

九月一日 晴

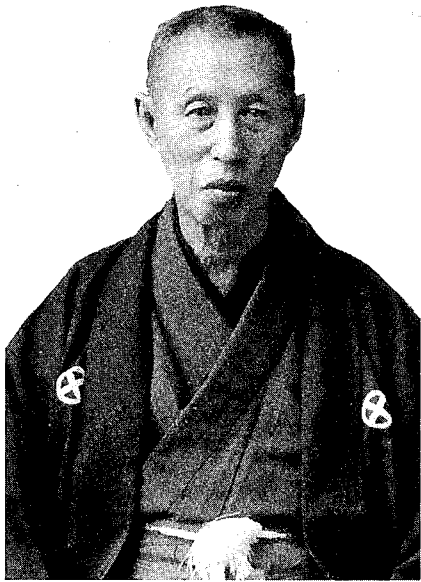
午前八時半出勤、銀行にて十一時四十分例の通り事務室を出、控室にて拙者一人食し終り立たんとするに

際し震動し来り逃げ出さんとせしに、室内にて二、三回顛倒し恐怖する間も無く鴨居落ち小壁落ち、次に天井と屋根が落ち来り、事務室の瓦葺き二階家は青物町の道路に向って倒壊せしに、控室は、亜鉛葺きの平屋にて事務室の二階に取り付けたる際より家屋の引き放れ、幸いその間となり負傷も無く這い出せしに、足

部に重き物載りしを感じければ、力を出して乗り出せしに、後にて考えれば、着衣の裾の物に引つ掛かりしなり。

身体の自由を得、倒壊せし亜鉛屋根に出でしに、続いて行員沖津、萩原もそこより出で来り、配島「留吉」は二階の裏窓より出で来りしに、いまだ二人不足にて高声に呼ばれば事務室より応声聞こゆるも引出す手順なく、やむを得ず屋根より土蔵の間に飛び下り、隣家との板塀を破り、目下、町役場新築準備のため移転執務の仮役場脇に出でたるに、

片岡永左衛門



負傷者も見え知りたる役場員も自失して立ち居りしも、安否を問うの間も惜しく、そのまま唐人町通りより青物町に廻りしに、両側の家屋も倒壊し、へとなりし下を潜り抜け、銀行前に至り幾度も高声に呼びしに、屋根より顔を出し無事なりと聞き、最早これにて責任を果せし如くに安心し、咄嗟の場合金庫も現金も忘れて後を頼んで駆け出せり。

その間に余震も震動の響も救い求めし人もありたらんも何も耳に入らず。両側倒潰の大手通りに出れば、火煙の登るを見る。小学校なりと云う人ありしも、これもただ聞くのみにて、掘端に出て見渡せば、一木氏「枢密院顧問官」一木喜徳郎別邸」の二階家は、自宅の地続きの高地になるに、倒壊せしか見えざれば、今迄は震災にもと多少は注意したる家なれば大丈夫と思ひし自家を氣遣い脇目もふらず走り帰れば、門は倒れ屋根は平潰れとなり、その屋根にて孫の龍夫の瓦を放しおれり。

立ち入れば幸子、泰子の姉妹は、屋根の下敷きとなりしと聞くも如何とするも

能わず、往来の人に手助けを哀願するも、震動を恐れて省みる者も無かりしに、尾崎「亮司」片岡永左衛門の娘婿は、最早焼失し下女の逃れ来りたるを思い、救助に來りくれる有様に云い遣いし、なおも清吉を呼び來たらんと飛び出せしに、道路は亀裂、家屋は倒潰し、歩行も自由ならず。

大工町に出て倒れし屋根の下を潜り、又は乗り越えて新道に曲がらんとせしに倒れ家にて路の塞がりたれば、本源寺に入り本堂脇を抜けて行きしに、清吉は隣の畑に家族と避難し、家も傾き今や火災にかからんとするに拘らず直ちに同行したるも、氣は焦心するも足は思う様に進まず。

ようやく帰れば尾崎芳子「片岡永左衛門の娘、尾崎亮司の妻」の危急の報により、路傍の人を強請し、二人を連れ來たり、姉妹を取り出しせし処にて、いまだ体温もあれば、病院に送らんと彼是なせしにどの道路も破壊し、あるいは失火中なれば、止むを得ず医師を迎えたくも、使いにては、来診思いもよらざれば、また走り出し学校の火災にて焦る如く

掘端を過ぎ、瓦長屋「南町一丁目」に至りしに、前方に黒煙の巻き昇れば、何処なりと思ひしに、足柄病院「南町二丁目九番」と聞き落胆し、十間ばかり引き返したるが、また、思い直し駆け出し天神社前に至れば、病院には焼死人も有りと言き絶望し到底医師の来診は不可能と断念し、仮に戸板に二人を載せ、その上に雨露の覆いをなし合掌念仏を唱えしが、大震災に意識の変調してか、悲哀の感じも容易に生ぜず呆然として、そのときの心はなんとも紙筆に書き現わし難く、このとき始めて銀行の事も思い出したるに、既に焼失と聞き、一層落胆し万事休すと思う刹那に世の無常を切実に感得し悲哀も生死も欲得も所謂理智も外見も超越し、真誠に天地任せの偉大意志を体得し、心身共に軽きを感じたり。

町は、数カ所より出火し猛威を振り盛んに延焼するも、意に介するの余裕もなかりしに、兩人の始末となり少し落ち着きたるに、五時にも何処よりかゴーゴーと非常の響きあり。何事かと門に出れば、海嘯なり

と逃げ来る者甚だ多きも判然とせず、その真相をと学校前に至れば、龍巻の諸所に起り、器物人体も半天に巻き揚げたりとの事なれば、一度帰宅し家人に安心を与え、銀行もその後の様子如何にと、龍夫と同行すれば、先刻銀行より駆け付けての帰途は心も心ならずも気がかざりしに、今見れば、さしも堅固に築きし城の石垣は殆ど全部崩潰し、樹木の堀に倒落せしは、今更に驚嘆せり。

裁判所前通りより町役場脇に出れば、この辺一面火の海にて、旧城外郭の老松は、いま盛りに焼けその音はすさまじく危険なれば引き返す。

途中、半潰の駄菓子屋に一人の男あり。店頭菓子を取り出すを見て食物の用意に気付き、立ち寄りて少し売ってもらんと云しに、お取りなされと云いながら出て行きたるが、包むものなく掴んで袂に入れしに、又一人の男来り取るはよきも、無断とは云いながら裏の方へ行くを呼び止め、無断に非ず、今ここに居たる者に断りしと云いしが、後の男は小略奪者にて、後は

店主なるべきも、この際は人の心も常と異なり、強いて拒絶もせざるは、自分の物として持って避難も出来ず、何事も成り行きとの心に成りしならん。

幸いにも自宅にては、四五日前に買い入れし白米二俵あり。これを俄作りの竈にて米を炊き握り飯となし僅かに飢えを凌ぎたり。

尾崎一家「小伊勢屋」のものも逃げ来り、倒潰せしにも、この家のありてこそ火にも追れず逃げ迷わず、飢えも凌ぎたりと大いに喜び。拙者等は、何が何やら種々気を取られ、空腹を覚えず一個を食したるを覚えたるも、井水は俄に濁水となり、それは困りたるも、製氷会社より氷を取り来りこれを解かし飯は出来たるも、それ以前は止む得ず濁り水に喉を潤おしたり。

晩景となり畑に蚊帳を吊り、尾崎一家と廿余人わずかに膝を入れしも徹夜数度の震動に皆々安き心もなし。地内にも避難者幾組も入り来り、いづれも露地に夜を明かせり。

夜に入るも油・蠟燭の用意なければ灯火もなく、蚊帳には入るも寝るにもあらず覚めるにもあらず。猛火の響と天を焦がす火光に恐怖と不安に明くるを待つともなく安眠せられぬままに人の世のともも何なるうたかたの覚めてあとなく暁のゆめ

この日自宅に在りしは、老妻と孫龍夫、幸子、涼子、素子と下女二人なりしが、中食の仕度も出来、龍夫は文武館の開館式に出席の都合にて真先に膳に向いしに、震動始まりたれば裏庭に逃げ出し、動揺し甚だしきたために樹木に取り付きながら居室を見れば崩壊し、祖母は縁先にて震落したる小壁の下となりたれば、走り来り声を掛けながら引き出し、畑に避難させ、次に下女二人は壁の下より声を揚げ救いを求め、居所判然したれば直ちに引き出し、妹三人を呼びしに、涼子は倒壊の屋根下より声を立てれば、今直ちに出す少し辛抱せよと声を掛け、声を心当りに屋根瓦を放し、下地を破りて引き出したるが、震動と同時に立ち揚りし際に天井の落ち来るを覚えたるも何事もなく、そのまま兄の声を力に立ち居たるに

引き出されしと。これは幸にも天井の落下する時に破壊したる間に頭部の入り天井と屋根裏の中間に在りて、負傷もせざりしなるべし。同じ座敷に居りし幸子素子の両人は始めより何等声のせざりしとなれば、初めに急所を打たれて即死せしに相違なし。もし、龍夫の居合わせざれば、なお、他にも傷死の有りしなるべし。何れにせよ龍夫のありしは一家の幸せなり。

尾崎芳子は、屋根より表に出で地続きの代官町より出火し自宅に延焼するを見て、姑と数人の下女と他より来り居りし数人の子供を引き纏めて逃げ来りしに、主人と舅の見えざれば心配せしに、屋根より裏に抜け出て、最初より福田寺に避難したりとて、四時過ぎに来り、一同安心せり。(続)

片岡永左衛門が遺した関東大震災の記録は、『片岡日記』と、謄写版刷の原本「駅鈴余音」に収めた「明治大帝御賜名旭日桐と小田原の大震災」の二通りあるが、本稿は、『片岡日記』を手直した「駅鈴余音」に載る分を選び、標題を「震災日記」と改めた。また、読みやすくするため、次のように整理をした。

1 旧仮名づかいを現代仮名づかいに改めた

2 句読点を整理し、段落をふやした。

(編集付記)

片岡永左衛門が遺した関東大震災の記録は、『片岡日記』と、謄写版刷の原本「駅鈴余音」に収めた「明治大帝御賜名旭日桐と小田原の大震災」の二通りあるが、本稿は、『片岡日記』を手直した「駅鈴余音」に載る分を選び、標題を「震災日記」と改めた。また、読みやすくするため、次のように整理をした。

1 旧仮名づかいを現代仮名づかいに改めた

2 句読点を整理し、段落をふやした。



倒壊した八ッ棟造りの「ういろう」 五十嵐写真館撮影

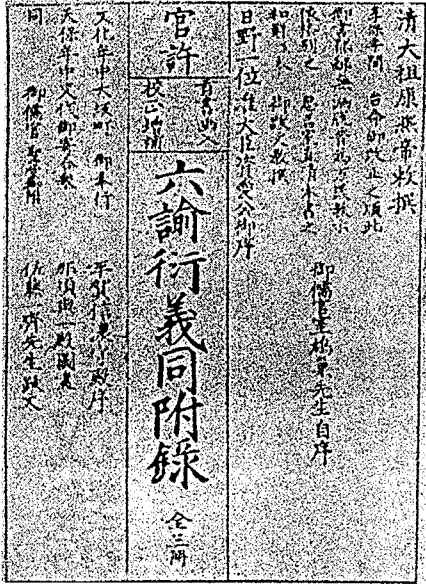
# 孝行者藤右衛門尚清 (2)

## 石綿 勉

### 三 藤右衛門の生き方

幕府は寛政元年(一七一九)全国各地の為政者に、「前々より孝行または奇特なるもの褒美ありし記録の提出」を命じた。この報告は「孝義録」として編集され、同十二年(一八〇〇)に五十巻をもって完了し、翌年に刊行した。庶民の道義の向上・思想の善導を意図して編集し、全国へ市販の布告を出したという。いわゆる徳育資料の全国版である。

編集する際、領主から褒美された者であっても、庶民の手本となり得ないと判断したものは登載しない選



六諭衍義

択をしたといわれる。「孝行者藤右衛門」の行状は、手本となるにふさわしい内容であると評価されたことになる。その行状は、孝養関係と本人関係との事例で構成されている。

○孝養関係の事例(九話)  
○飲食への配慮(三話)

・やわらかく調理  
・菓子への買ひ与え  
・お茶入れと談話

○体をいたわる(四話)  
・涼意と蚊を追い払い  
・寝物語と添寝  
・母の介抱と死

○心配する配慮(二話)  
・剃髪と気血の衰え

・酒の害と禁酒  
◎本人関係の事例(七話)

・身分の紹介と父母の死  
・村びとに敬老の啓蒙  
・家業専念と母の世話  
・早起きと信仰の習慣  
・母の言行を実践  
・家業の恵みと信仰  
・領主から年貢免除褒美  
とても具体的で、身近なわかり易い事例である。孝義録のもつ庶民教化・啓蒙という役割にもとづく編集の配慮であろう。

掲載の藤右衛門は、誠に細やかな気遣いをみせての母親思いで、面倒見のよさが躍動している。それは異常と感じる程の熱い思いをこめた世話をみせ、意欲的で一途に母の安楽を思いやり、実践化している。

本人関係事例も、強い意志と信仰心で、精力的に実践している個性である。母生存中は「日の出前に起きてよるの仕事をなすべし」という母のことは習慣化し、死後は「先祖厚恩母菩提」という供養を施している。母の来世の安楽を祈っている。母の生死共に安楽確保の努力をしている。

外にあっては村びとに敬老精神を啓蒙し、家では家業に励み孝行に徹して善良な領民ぶりを発揮している。文末には年貢米の生涯免除の褒美を掲げて、篤行者

の恩恵を伝えている。

為政者はこうした藤右衛門の生き方を賞揚(領主褒美・孝義録登載)して、民衆の生き方の手本とした。つまり幕府の期待する人間像のふさわしい生き方を示していた藤右衛門といえる。

藤右衛門の生き方は、幕府の教化政策にそう傾向をみせていて、彼の行動を通して為政者の願いを表出しているように思える。次はその具体例である。

○幕府の指定した、寺子屋における道徳教育の教科書『六諭衍義大意』の内容に、彼の生き方は符合している模範的である。

・六諭衍義大意の要点  
(1) 親孝行の事  
(2) 年長者尊敬の事  
(3) 近隣と親しくする事  
(4) 子孫を教訓し家業に励む事  
(5) 分限をわきまえ職責を全うする事

(6) 非道の行ないをせぬ事  
この書は、庶民教育の根源として、享保七年(一七三三)に刊行された教訓書である。藤右衛門は二十歳時であった。(領主表彰は七十歳時)

幕府は全国の寺子屋に、『六諭衍義大意』を習字手本にせよと命じたり、礼儀作法の躰や忠孝の実践道徳の教授を通達したりして、徳育の教化を図ったという。諸藩でも五人組を利用して、

命令や通達を村役人から農民に読み聞かせて、庶民教化に努めたという。

村役人(百姓代)を経験した藤右衛門は、『六諭衍義大意』の影響を受けて生きてきたように思える。その結果が、この要請に対応する具体的な人間像と思われる手本になったと考える。

○藤右衛門の早起きや断酒・家業奨励の事例に、為政者の期待を垣間見る思いがする。幕府が庶民の生活を規制した法令への忠実な履行者として、藤右衛門の意欲的な実践を手本に活用したように思える。

藤右衛門の事例から、どんな徳育の教化が期待できるのか、次はその仮説である。(当時)に立って)  
○親の言を尊重し、孝養に尽す生活習慣。  
○相手(親)の立場になって物事を考え、共感し、思いやる心情の育成。

○敬老精神の涵養と実践。  
○断酒する自律自制の生活。  
○早起きして仕事に励む生活習慣の形成。

○先祖に報恩感謝し供養する信仰の実践……等。  
藤右衛門は、為政者の願う人間像にそう教科書的な生き方であった。それは人々の徳育教化に生き続け、醇風美俗を養ってきた。

風をいたみ

若うつ波のおのれのみ

くだけて物を思ふ頃かな

これは、百人一首の中の、源重之の歌であります。

平成六年十月発行『小田原史談』第一五八号に、史談会で七月二日に小田原市千代台史跡めぐりを行ったという記事が載っております。福島匠著『西さがみ歴史への旅』(昭和六十二年発行)の、第四十頁に、「千代は足柄国府のあとだった?」と言ふタイトルがありました。

小田原市、東華軒で販売されている「こゆるぎ茶めしについて」の由来書を読むと次のように書かれています。

こゆるぎの

磯のわかめもからぬみは

沖の小波やたれによすらん

(源重之集より)

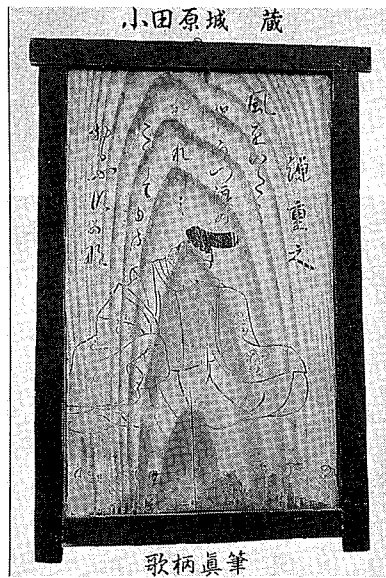
「こゆるぎ」と言ふ名称は、神奈川県(昔の相模国)に現在三ヶ所あります。その一つに大磯より西海岸一帯を「こゆるぎの磯」と言いその沿岸を「こゆるぎの里」と称しております。

また一説によりますと、小田原という地名がどんな語源から起きたものであるかと言うことについて、古くから種々の議論があります。古くから種々の議論が(こゆるぎ)の文字を草書体で書いたのを読み誤ったところから起き

たのだと言うことです。これは『新編相模風土記』足柄下郡巻二の小田原城の項に記されております。

以上のようなことから「こゆるぎ」の名称を用いて、この地方で採れます山海の珍味をまげ物の容器に盛り込みご旅行の皆様にご紹介を申し上げ、なお一層楽しい旅の思い出を残していただくように作られたのがこの「こゆるぎ茶めし」でございます。

一千年前(995年)に  
旧縁を求めて  
歌人 源重之  
日下部庄一



した。「こゆるぎの磯」について県史にそれを求めますと、『神奈川県史』通史編I原始、古代、中世(昭和五十六年三月二十五日発行)の付録「県史だより」に載る、目崎徳衛先生(聖心女子大学教授)の「相模の国司」(第五頁)を引用させていただきま

また、県史の本巻(古代三頁)から引用させていただきますと、天皇の末でありながら、官はひくく、地方官を歴任して、相模にも足跡をのこして、長保二年(1010)陸奥国で没した歌人国司に源重之がある。彼は、清和天皇の皇子貞元親王の孫であるが、冷泉天皇が東宮のとき、帯刀先生となり、天皇即位とともに右近将監、左近将監、相模権介を経て、天延四年(1176)に相模権守となった(三十六歌仙伝)。彼の歌集「重之集」をみると、彼の足跡は、筑紫、日向、肥後、但馬、播磨、美濃など、西国諸国にも及んでおり、東は、駿河、陸奥に及んでいる。……長徳元年(975)気骨の公卿藤原実方が、殿中での行動をとがめられて陸奥守に左遷されると、重之は、実方をたよって再度の陸奥入りをし、実方が四年後に陸奥国で没してのちも、陸奥にとどまって、その翌年陸奥で生涯を閉じるのである。(三六頁)

ます。と書かれてありました。以上のことを読んで、歌枕となつた「こゆるぎ」の名称を用いておられる小田原市内の方々を電話帳で調べてみましたら、こゆるぎうどん・そば、こゆるぎ豆腐店、こゆるぎ幼稚園と、ありました。また、小田原には、劇団「こゆるぎ座」があり、その第四十二回公演が十月に小田原市民会館大ホールで盛大に行われま

ある。たとえば、天禄二年(1171)権介、貞元元年(975)権守となつて「こゆるぎの磯」の歌枕化に一役買った源重之(小著『平安文化史論』)や、寛仁四年(1020)の守大江公資の妻として夫に同行し、その名も「相模」と呼ばれた女流歌人に匹敵する存在を、もっと早い時期に探り出したかった。

この「長徳元年、西暦九九五年」は、平成七年から数えて、丁度千年前であります。千年前の源重之の公に思いをめぐらし、もし小田原の千代台に国府があつたなら、と言ふ空想にふけりながら、重之に係わる多くの著書から文章を引用させていただきました。



## 川邊本家物語り (2)

かわべ たかし  
川邊 昂

## 三 川邊家の苦難のとき

元禄十六年(一七〇〇)十一月二十二日明け方江戸大地震が起こった。寛永十年一月二十一日の寛永地震から七十年ぶりである。小田原藩内でもその被害は大きく、潰家九千五百四十軒に加え、出火焼失により死者二千三百人にも及び、応永二十三年(一四二六)大森頼春によって築かれた小田原城も大被害をうけた。川邊家屋も大被害をうけ、その復旧に大きな努力を傾けた。が、それから四年、宝永四年(一七二七)十一月二十三日突

も農作物の大半を失ない、苦難の道を歩まねばならなかった。ところがそれから五年後、正徳二年(一七三二)七月二十七日を中心に数度に亘って酒匂川の大洪水があり、堤防が決壊して再び農家に大打撃を与えた。この時から後数十年に亘り用水堰工事が農家の大きな負担となった。

こうした天災の続く中で、川邊家二代清兵衛家貞は宝永七年(一七三〇)一月五日七十四歳の生涯を終え菩提寺大見寺に埋葬された。時に三代清兵衛貞次は号を段右衛門貞次と改め心機一転を計った。四十四歳である。長男慶貞は十五歳、弟善左衛門・忠蔵共に健在で近隣の寺子屋に通っていた。この頃、江戸幕府では間部詮房・新井白石を登用し、所謂正徳の治が始まった。そして享保元年(一七二〇)紀州藩主徳川吉宗が將軍となり、大岡忠相を江戸町奉行に登用し更に評定所に目安箱をおく等の享保の

改革が始まった。四代目川邊慶貞は温厚な人柄で学問を好み、二十歳で妻帯して享保二年(一七二七)長女ユウ、続いて翌年次女ヨシが生まれた。その後三女が生まれたが早逝した。菩提寺大見寺も打ち続く災害からの復旧も一段落したところで、享保十四年衆生済度を祈念して境内に間魔堂を建立した。この頃、川邊慶貞の弟忠蔵は分家して独立し箱根芦ノ湯で温泉宿を始めた。家康が宿駅制度を設けた東海道は主要道路であり、箱根八里の山越えは深い溪谷や坂道が天下の険と称された難所であり、芦ノ湯の温泉宿も旅行者のよい休憩所として利用された。

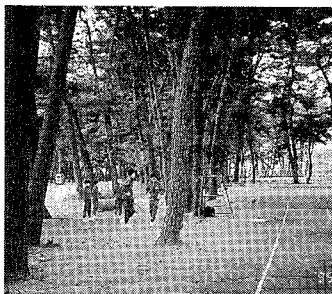
しかし、災害は尚続いた。享保十七年(一七三二)西国地方でウンカの大発生による飢饉が起こり、米価は高騰して各所に米騒動が起こった。これが享保の大飢饉である。更に小田原では享保十九年二月三十日大火事があり府内の人家の大半が焼失した。川邊家四代慶貞には遂に男子が生まれず、やむなく長女ユウに養子をむかえることとし元文元年(一七二六)ユウ二十歳の折、相州足柄下郡田島村(小田原市)の三浦伴蔵の次男宇太郎をユウの婿に迎えた。ところが宇太郎は結婚後間もなく病死してしまった。そこで宇太郎の弟の三男三浦賢三を再びユウの婿に迎えた。賢三はユウと同年齢であり、結婚してから清兵衛と名乗った。これが後の川邊家五代目弾右衛門貞辰であり、この時から川邊家は三代に亘って婦系相続が続くのである。

打ち続く災害にもめげず家運の発展を計り所有地を拡げてきた三代段右衛門貞次は、元文三年(一七三三)八月二十七日七十二歳の生涯を終えた。時に、四代段右衛門慶貞四十三歳・同妻三十六歳であり、婿の清兵衛とユウの間の男子太十郎と次女・三女とも早逝してしまった。そして更に、寛保三年(一七四三)一月二十五日四代目段右衛門慶貞も四十八歳でこの世を去った。五代貞辰二十七歳・ユウ二十七歳・長女輝子五歳の時であり、貞辰の母四十一歳・祖母七十歳であった。五代目となった貞辰は寛保三年四月十四日名を弾右衛門貞辰と改め家業を受けついで。

が、翌年の延享元年(一七六四)七月二十三日妻ユウが病氣により二十八歳で逝去した。そこで、打ち続く不幸により嫁にいかず家事に励んでいたユウの妹ヨシ(二十七歳)が貞辰の妻になおって家事をするようになったが、ヨシには子が生まれなかった。寛延元年(一七五〇)春、五代弾右衛門貞辰は、川邊家の将来に備えて海岸の所有地を中心に酒匂海岸に松苗十万本を植樹した。これが、明治になり「松涛園」として中央政財界の人々の避暑別荘で有名となったもので、現在西湘バイパスで大部分がなくなったものの酒匂中学校校庭の松林が僅かにその面影を残している。

寛延元年七月二十一日川邊家五代貞辰の祖母に当る貞次の妻は七十五歳の生涯を終えた。そして川邊家は宮々と家業の農業に励み家運の隆昌をはかった。

宝暦十年(一七六〇)江戸幕府では吉宗の孫家治が十代將軍となった。宝暦十二年、川邊家五代貞辰の唯一の子輝子も二十四歳となり養子を迎えることとした。そして、東京芝田町の仙波太郎兵衛の次男仙波保次郎と



松濤園跡

の縁談がまとまり、宝曆十三年(一七六〇)十二月二十五日養子縁組をして華燭の典が挙げられて保次郎は川邊保家と改名した。これが川邊家六代目となる人である。この保家は、人に親切であり酒匂村人の世話をよくしたので、多くの人々から親しまれ尊敬された。翌宝曆十四年長女市子が誕生した。それから続いて男子三人が生まれたが男子はいづれも早逝した。

明和三年(一七六六)十一月

江戸幕府では、明和四年田沼意次が將軍家治の側用人となり、安永元年(一七七〇)には老中となって所謂「田沼時代」が始まった。川邊家では、安永二年三月二十六日五代目貞辰の妻ヨシが五十六歳で逝去した。続いて安永四年十二月十九日保家の妻輝子も三十七歳の若さで病死した。保家三十六歳・祖母七十三歳・長女市子十二歳の時である。

保家四十三歳の時の天明二年(一七八〇)七月十四日、

八十年ぶりに再び小田原は大地震に見舞われ、府内の人家の大半が潰壊した。川邊家も大被害をうけた。加えて、天明二年から五年間関東奥州地域の大飢饉が続き、小田原領内(藩主大久保忠顕)の被害も甚大であった。これが天明の大飢饉であり、奥州では死者数十万人に及び米価は高騰して江戸や大阪では「天明の打ちこわし」と云われる町民騒動が頻発した。更に翌天明三年には浅間山の噴火が起こり農家に大打撃を与えた。こうした中で天明四年十月十三日、團右衛門保家の祖母が八十二歳の天寿を終えた。そして家族は保家四十五歳と市子二十一歳の二人となった。そこで、天明五年十二月足柄下郡久野村(小田原市)山田五左衛門の次男山田弥太郎を市子の婿に迎えた。弥太郎は結婚後に迎えた。弥太郎は結婚後に迎えた。弥太郎は結婚後に迎えた。弥太郎は結婚後に迎えた。

四 川邊家中興のとき

天明七年(一七八七)七代目段右衛門家勝・市子夫妻に男子が生まれ家政と名のつた。丁度この年の七月二十三日には近くの栢山村(小田原市)で二宮尊徳が生まれている。その後、家勝には四人の女子が生まれ、後に長女は久野村の山田家へ、次女熊は田島村の三浦家へ嫁ぎ、三女は早逝し、四女菊は酒匂村(小田原市)の小島家へ嫁いだ。

天明七年(一七八七)七代目

あり加えて卓絶な剛力を持った男丈夫であった。川邊家に婿にきてからは、打ち続いた天災にもめげず自分で農耕に励み、朝早くから夜おそくまで荒地の開墾を行ない倦くことなく開墾した農地は数町歩に及ぶと云われる。加えて研究心も強く、農業土木のことをよく勉強しており、更に老いても益々元気で何事も村人の相談相手となった評判の人物であった。従って家庭内でも話のわかる厳父であったと長男家政は述べている。

江戸幕府の寛政の改革が

進む中で、寛政三年(一八二一)八月五日小田原地方は大暴風雨に襲われ酒匂川大洪水が起こって小田原領内の被害は甚大であった。その後九年、享和二年(一八三二)六月三十日豪雨によって再び酒匂川は氾濫し、酒匂川治水は小田原藩の課題であった。この享保二年、川邊家八代目家政は十六歳であり、同年の二宮金次郎(後尊徳)は一家離散して己は万兵衛宅に住んでいた時である。享和三年(一八三三)小田原藩主大久保忠顕は四十九歳をもって没し、後日名君といわれる大久保忠貞が藩主を継いだ。文化元年(一八〇四)ロシア使節が長崎にて貿易を要求する事件があり、文化五年間宮林蔵が樺太を探検した。

こうして災害の中でも川

邊家七代目家勝は皆々と開墾を続け家運の拡大に努めていた。その長男家政(後の八代目)は、生まれながら温厚な性格であり孝心厚く、幼いときから学問を好み、長じては村人の子弟を集めて学問を教えた人柄であり、祖先を尊びその回向称名は一日としておこならなかつた律儀な人であった。文化十年(一八三三)家政は二十六歳となり、足柄下郡飯泉村(小田原市)の山口徳右衛門の娘徳と結婚した。ところが徳は、結婚生活一年の翌文化十一年七月十六日二十一歳の若さで病死してしまった。そこで家政は、分家筋に当る箱根芦ノ湯の川邊忠蔵の娘紋を妻として再婚した。が、この紋にも子が生まれなかつた。

文化十四年二月一日小田

原で大火事があり、府内の人家の過半数が焼失した。幸い酒匂村に飛火もなかつたが、その後川邊家も火災にあふことになる。(続)

## 益田信世の

## 出猟記念写真から

岡部 忠夫

ここに掲げたのは写真の部分だけで、台紙の左右の、「天城山出猟記念撮影大正十年十二月上旬」「呈田口房吉君 楽庵主人」と墨で書かれた字は載っていない。うまい字ではないが、さあつと、書き流したような字体で、あまり物事にこだわらないような人柄の感じを受

ける。楽庵主人とは、益田孝の子で、初代小田原市長となつた益田信世のこと。小田原町緑町四丁目(現・栄町一丁目)に楽庵と称した数千坪の屋敷に住んでいた。

猟銃を携え二匹のポインター種の猟犬を連れたのが信世である。年齢を推算すると満三十六歳となる。

一方、田口房吉っあん(筆者の父が呼んでいた言葉を親しみをこめてそのまま使わせて頂く)は、向かって左側で、猟銃を持ち猟犬を手に許に引きつけている。私が知る房吉っあんは昭和の始

めの頃で、髪や髭には白いものが混じっていた。気分のよい人であったという印象が残っている。だが、写真に写る房吉っあんは、満四十四歳の男盛りで、小田原紡績で、女工募集の仕事を担当していたという。

房吉っあんが信世の猟のお供をするようになったのは、益田孝がお膳立てした小田原紡績が大正六年、足柄村井細田(小田原市扇町二丁目)に創立され、信世が、常務取締役就任してからのことであろう。

房吉っあんの隣の人は、名前が分からないが、髭を生やしているのをみると、やはり小田原紡績の仕事をしていたのであろうか。その頃、小田紡は羽振りよく、背広を着ていたのは、小田紡の社員だけだったと、小田紡と同じ井細田にあった伊豆銀行足柄支店に勤め、昭和二十九年定年で静岡銀行熱海支店長を最後に退職

された古川菊造さん(故人)に聞いた事がある。当時、社員といえは、事務管理部門のほんの一部の人たちしか指さなかった時代でもあった。その隣りで獲物を担いでいるのは、高田春吉っあん。房吉っあんと同じ井細田に住み、家が近くで親交があったため、信世の猟の仲間に加わったのかも知れない。震災前迄は水車で製粉する仕事をしていた。後棒を担ぐ人の名は不明である。

獲物をみると、猪一頭、兎一羽、それに雉と山鳥の數羽。その中で猪とは珍しい。

兎や鳥は散弾で射とめられるが、猪は、そういう訳にはいかず、一発弾でなければ倒せない。それに、猪狩り用に訓練された猟犬でないと、猪の牙で犬が重傷を負う事があるらしい。

天城山出猟で猪を射とめたとは、それだけ数が多かったのであろうか、それにしても僥倖としか云いようがない。あるいは、信世が金にあかして、天城の猟師から手に入れたのではないか、といった疑問が湧くが、そんな穿鑿はやめたのがよい。射手の腕を疑うことに



なる。

猪には、猪突猛進とか猪武者といった表現があるが、元来、用心深い夜行性の動物で、昼は樹木や茅の生い繁った暗がりに潜み、夜になって餌を捜し廻る習性を持つていと聞く。

小田原に猪が棲息するようになったのは、明神岳(みやまじょうがたけ)や明星岳の外輪に広がる

久野の原野に造林が行われ、林が鬱蒼として猪の恰好の棲処となつてからである。造林が計画的に行われるようになったのは、大正四年(一九一五)のこと。それから二十年足らずの昭和八、九年に猪が久野山一帯に出没するようになった。その猪は、天城から移って来たものであると、その頃、小田

原の鉄砲打ち仲間はその思っていた。

しかし、江戸時代、仙石原方面で猪を捕えたと、出典は忘れたが、何かに載っていたことがある。あるいは、植林されて以来、猪の数が増えたという事であろうか。

それにしても、昭和の始めの頃は、小田原には猪狩り専門の猟犬がいなかった。猪を射止めるのは大変な事であった。まず猪を見つけて追い出すのが一日仕事。猟犬でなしに人間が猪の足跡を辿って搜索するのであるから相当、熟練と根気を要し、並大抵の事ではなかった。ようやく猪のありかを突き止めても、猪を追い出す方向に射手がいなければならぬ。十数人の射手が予め猪の出そうな「たつま」で待ち伏せすることになる。猪が出てきそうな場所があっても人手が足りなく、射手が配置できないときは、その場所で大声を出したり、煙草を喫ったりする陽動作戦をとった。ところが、そうは問屋が卸さない。猪は、裏をかいながら逃げようとする。逃げられてはその日はお仕舞で、他日を期さなければならなかった。

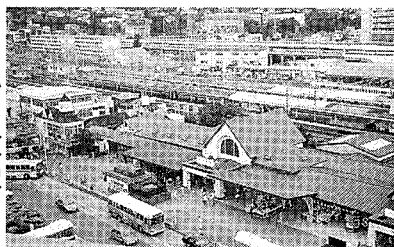
このような苦勞を幾度か重ねて、猪が小田原で初めて射止められたのは、昭和十年(一九三三)のことであった。たしか一月ではなかったかと思う。『新聞の神奈川版のトップに「猪幸さんが亥年に猪を仕とめた」といった見出しの写真入りで伝えられたことがあった。猪幸さんは、久野の舟原の人で、姓は忘れてしまったが、行雄が本当の名前であったと思う。記事が面白いようにと語呂合わせで違った名で伝えるのもまかり通った時代でもあった。現在の新聞ではとても思いもよらぬ事である。

供していただいたのは、田口鏡子さんと、田口さん宅(房吉っあんは、田口さんのご主人の祖父に当たる)には、益田信世から贈られた狩猟記念の写真が、この他に三枚も保存されている。勿論いづれも房吉っあんが写っている。撮影場所は四枚とも、その背景から現地ではなく、楽庵に戻ってから五十嵐写真館の主人を招いて撮ったものであろう。

「呈田口君 楽庵主人」と台紙の表に信世の添え書き。総勢八名中鉄砲を持つのは七名。猟犬はいない。獲物は鴨類で四十一匹、湖か川で狩猟したのであろう。

存在であった。私の父も鉄砲道楽で、箱根外輪山の裾野や、酒匂川、狩川を猟場としていたようだ。あるとき、大雄山近くの林の中で猿の姿を見かけたが、一瞬のことで、翌日同じ場所に出かけ、しばらく待ち構えていたが、ついで姿をあらわさなかったという。現在、早川、片浦、湯河原方面から久野にかけて、猿の群が現われ農作物を荒らして、農家が手を焼いて困っているのを考えれば、隔世の感がある。観光資源にと、人間が猿を甘やかしたツケが、今ここに廻って来ている。生物保護とか野性動物との共生とかの主張の下、猿害防止対策が、被害者の農家にとっては、生ぬるいものに映っている。

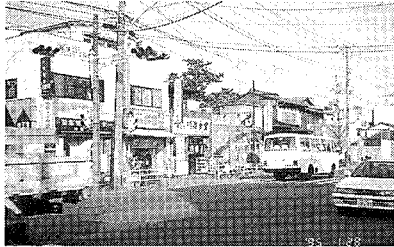
<街並み風景>



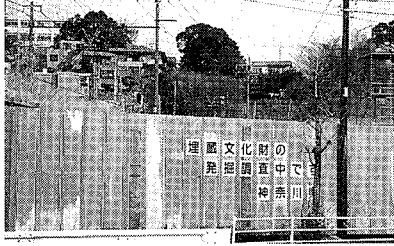
小田原駅



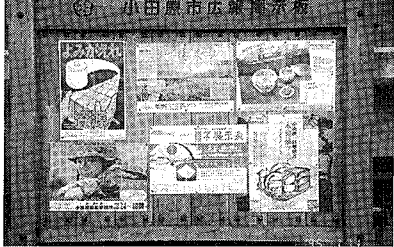
大手前通り



箱根口



早川口

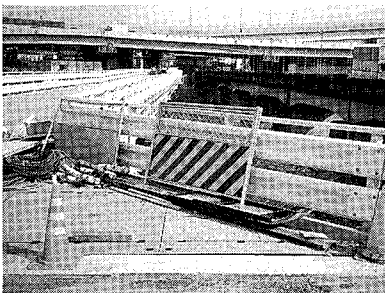


掲示板

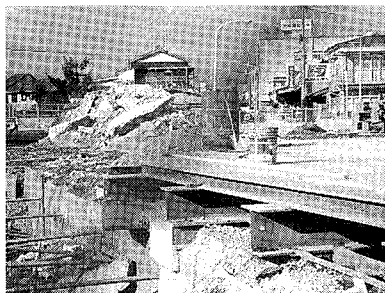
阪神大震災救援募金



早川橋架替工事



井細田大橋架替工事



お堀に向けて一斉放水  
を行う消防署員(梯子車)  
消防団員ら



# 材木屋綺談 その七

## たかた・きくせん

川端康成の「古都」という小説はテレビ映画でも屢々放映されているから、その内容を知っている人は多いと思う。

さてこの北山に産する北山丸太は、銘木の中でも最も美しい高級品である。谿が深く霧が多いこの地に育つ杉は、村人の精魂こめた枝打ち、間伐等の結果、この杉は年輪が密で、元か

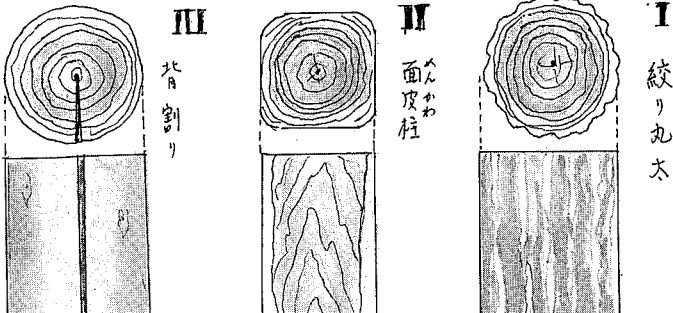
# 北山丸太

ら末まで太さに変化の少ない柱材に成長するのである。この立木を伐り、杉皮を剥ぐと大へん美しい樹肌が現われ、これを細かい川砂と糲殻で磨くと良質の磨丸太が仕上るのである。この丸太は床柱用が主だが、その中に皮肌が絞れて変化のあ

る堅縞を呈するものがあり、銘木業者はこれを天然絞りと称して珍重する。しかしこの天然絞りは滅多に見ることがないから、今では若木のときに細かい鉄棒を簾状に巻いて樹肌に凹凸を造り出す人口絞り丸太の生産が盛んである。こ

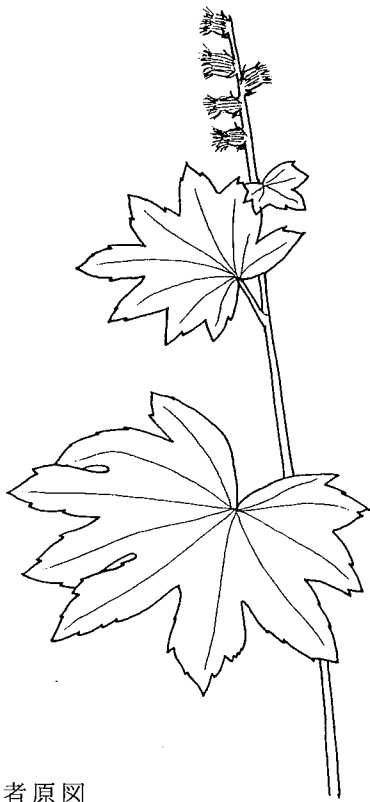
ちには冷たい水と砂で手は荒れ辛い作業なのである。小田原近辺の杉丸太も樹皮を剥けば樹肌は奇麗だが三ヶ月もしないうちに白い肌が茶色に変色してしまふ。その点北山杉は変色しない処に価値がある。第一単純に育てた杉では、北山杉のように元、末のない箸のような形状にはならないのである。

絞り丸太とともに北山杉の特徴は「面皮柱」と称する、柱の四隅に皮肌を残す柱の生産が出来ることである。元より末が細い普通の丸太では同じ幅の皮肌は出来ないからである。図面参照。柱のこのついでに、素人の方にはよく判らない背割のことを記そう。丸太は乾燥すると収縮して表面に干割れを生ずるので、これを防ぐために四角の柱の一面に、あらかじめ人工的



に芯まで鋸を入れる。すると収縮がここに集中して表面の干割れを防ぐのである。知らない人は、うちの柱に疵物を使ったとお叱りを受けることもあって笑い話になるのである。

オオモミジガサ (きく科)  
Miricacalia makineana Kitamura



筆者原図

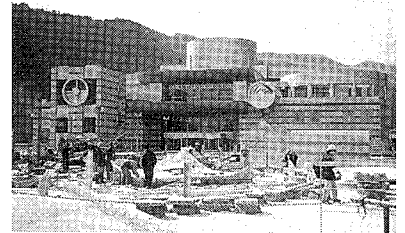
オオモミジガサは福島県以南のブナ帯に分布する。

神奈川県でブナ帯といえば標高およそ千メートル以

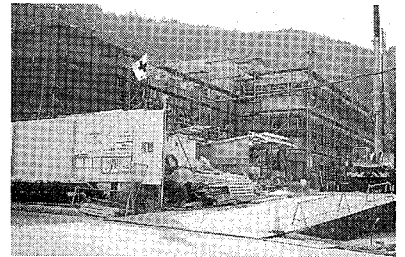
# 丹沢の植物

23

## 城川四郎きがわしろう



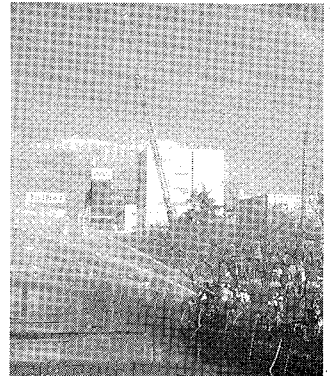
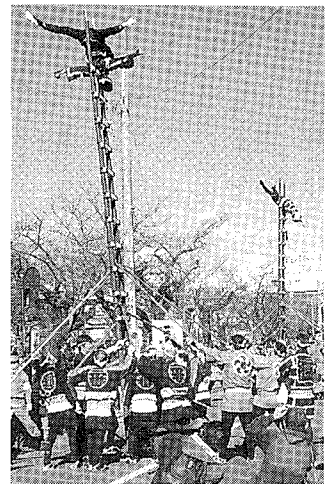
県立生命の星・地球博物館新築工事 (入生田) 3月21日開館



県立温泉地学研究所新築工事 (入生田)

上の山域になるから丹沢と箱根に限られる。しかし、ブナが林をつくるほどにたくさん生えて、立派なブナ林を形成しているのは丹沢だけである。丹沢の山々の山頂は雲霧に包まれることが多く多湿であり、比較

1月11日  
出初め式風景



平坦なために雨水も停滞し、土壌が流れ去ることも少ない。したがって、山頂付近のブナ林床はかなり肥沃である。オオモミジガサはそういう環境に好んで生える。神奈川県内では丹沢だけに分布するのをもっともなわけである。

植物社会学上では植物群落の単位としてオオモミジガサーブナ群集と名づけられている。

ところが近年、丹沢山頂付近のブナが無惨に立ち枯れるという異変がおきている。

原因はまだ調査研究中であるが酸性霧など大気汚染が主な原因であろうと考えられている。そして、近年、ブナの枯死とは全く異なる理由で林床の草本類の発育が著しく阻害され、消滅していくものが多い。オオモミジガサも今では西丹沢の

大室山、加入道山方面で見ることができないほどに少なくなってしまった。原因はシカの食害である。

近年シカの食害がそんなにひどくなった理由はここでは触れないが今の丹沢にはオオモミジガサーブナ群集の名で呼ぶことのできる植生はほとんど消えてしまっただけである。

オオモミジガサの茎は高さほぼ八〇センチ、下部の葉の径は三〇センチぐらい、花は夏に咲き、黄色である。茎が伸びるとシカが食べるので、生き残っている株もめったに花を咲かせることができない。山では、葉だけ見るとオオモミジガサと間違えるくらいよく似ているヤマタイミンガサがたくさん生えているがシカにとっては間違えないほどに味が違うのであろう。



## 古墳遍歴 (十六)

## 知られざる皇陵 (九)

飯田悟郎

## 春日宮天皇陵

春日宮天皇(カスガノミヤテンノウ)。かなり歴史をお好きな方でもこの天皇の名をご存知ない人もいるかも知れません。と云うのも、ご歴代の中には含まれておらず、尊号はその所生の皇子の一人が天皇となられたための没後の追贈だからなのです。

この方は、天智天皇の皇子である施基皇子(シキノミコ、志貴皇子)でございまして、壬申の乱以後、皇統は天武天皇系の皇族の独占するところとなり、この方のような天智天皇系の皇族の出番はなく、いわば日蔭の身、冷や飯食いの扱いで、肩身狭く暮らしていたのですが、第四十八代称徳天皇の没後皇位を継ぐに適當な方がなく、一時は臣籍に下っていた方をのぼせてはどうかと云う意見もあったのだそうですが、左大臣永手を中心とする藤原一族

## 光仁天皇陵

偶然にも第四十九代の皇位に即かれた光仁天皇は、諡号を天宗高紹天皇(アメムネタカツギノスメラミコト)と申し上げ、聖武天皇の皇女で孝謙・称徳女帝の異母姉井上(イノエ、又はイガミ)内親王を皇后に立て、その間に儲けられた他戸(オサベ、又はオサド)王を皇太子とされましたが、これが後に大きな事件のもととなりまして、後に桓武天皇と

それともあれ、万葉の歌人としてもよく知られている春日宮天皇の御陵は、現在は奈良市内とは言え、市街を東に遠く離れた草深い山間の田原の里にあり、高円山の裾を巡って田原に入るとバスは御陵前に止まります。御陵自体は円墳でさほど大きなものではなく、すこし荒れていますが、御陵に通ずる長い参道を辿ってゆく折の感じが何とも素晴らしく、全体として天皇陵に相応しいのびやかな雰囲気

に包まれていまして、奈良に行かれた節など、一度詣でられることをお勧めしたいと存じます。

交流も頻繁で、遣唐使も派遣したりしていますが、朝廷内部の混乱も相当なもので、謀反を企てたとして皇后、皇太子を廃したほかにも、藤原氏内部の権力闘争から指導方針に乱れが生じるなど、それまでに累積され、解決の急がれる諸問題が多く存在し、老齢の光仁天皇には負担が過重であり、在位十二年にして病に伏し、後事を託して位を山部皇子に譲り、宝亀十二年(781)を天応と改めた年の十一月、七十三年の生涯を閉じられ、翌二年一月広岡山陵(ヒロオカヤマノミササギ)に葬られました。此の地が何処かは不明であり、一説には現陵の北四キロほどの、京都府との境にある広岡付近ではないか、と云われています。

ともあれ、此の陵は田原東陵(タハラノヒガシノミササギ)と申し、また、春日宮天皇の田原西陵に呼応し、後田原山陵とも呼ばれています。

バスを田原の中心地日笠で下車して北に向かいますと、ほどなく集落を過ぎて山間の谷盆地の中央にこの御陵が拝されます。二段又は三段に築成された不整形な円墳で、東西約三十八米、南北約三十米、高さ約八米の墳丘の周囲には空濛が巡らしてあり、南側から参道を渡って詣でます。

尚、この陵の西六百米の低い山の斜面に、近年畑の造成中に偶然発見されて、墓誌の出土したことで評判になった、古事記の編者の太安万侶の墓もあり、奈良時代に此のあたりが皇族・貴族・官人の埋葬地であったという説があるのも首肯出来ませう。

古代史ブームが云々されている昨今ではございませうが、此の辺りまではさすがに訪れる人影も稀であり、春日宮天皇陵とも併せて、半日の行程を組まれば、ゆっくり雰囲気を楽しめることと存じます。



# 紅蓮洞・坂本易徳 ⑳

## 岡部 忠 夫

### 在野精神を貫く 三宅雪嶺

東京大学と工部大学校の合併により、その名称を帝国大学と改めただけでも、「世間の荒膽を拉ぐに足」ると、『同時代史』で批判を加えた三宅雪嶺の論評は更に続く。

その事を記す前にちよつと『同時代史』のことに触れると、この書は、雪嶺が大正十五年(一九二六)の六十六歳のときから昭和二十年(一九四五)八十五歳で没する迄の二十年間、「同時代観」と題して『我観』『東大陸』に、日本近代の通史を二百二十二回にわたり連載されたものを、雪嶺が没後、全六巻として出版されたものである。まさしく、雪嶺のライフワークであり、史論の名著されている。

雪嶺は、明治十六年(一八八三)、東京大学文学部を卒業すると共に同文学部の准助教となり、ついで十九年に文部省に勤める傍ら、東京専門学校(早稲田大学の前身)の講師として哲学の授業をした。ところが翌二十年、文部省の御役所仕事に腹を立てて辞職した。なお、東京専門学校の講師は、明治四十四年(一九二一)まで続いている。

また、幸徳秋水の『キリスト教抹殺論』の序文を執筆している。その時期は、明治四十三年(一九〇〇)六月、幸徳秋水が湯河原で逮捕され、翌年一月十八日「大逆事件」として死刑の宣告を下された翌日のことである。勿論、雪嶺の序文は、内務省より掲載を禁じられた。これらの事は、雪嶺が如何に反骨精神が旺盛で正義感が強く、在野精神を貫いたことを物語ろう。

### 帝国大学について 雪嶺の論評

以上のようなことを踏まえた上で、『同時代史』第二巻から、雪嶺の帝国大学発足についての評論のあらましを紹介しよう。

大学の改称に伴い、大綱・細則にわたって改革しているが、どれだけ将来を見通しての改革であるのか疑わしい。

帝国大学の名称を選んだのは、帝国唯一の大学とする意なのか、当分の間、この名称で充分であるという事なのかははっきりしない。

そもそも、明治七年(一八七二)、開成学校に東京の名を冠し、次いで東京大学と称したのは、他に同程度の大学の設置を考慮しての事で、それならば帝国大学に東京の名を冠しなければならぬ。もし不完全な大学をいくつも設置するよりは、

一校の大学を充実するのがよいとして、帝国大学一校だけで足ると考えなければ、国運の発展を考えない極めて近視眼的な考え方だ。

帝国大学は、大学院と分科大学とで構成し、分科大学を、法科大学、医科大学、工科大学、文科大学、理科大学に分けたのは、その名称の選択が拙劣である。帝国大学といひ、分科大学といひ、共に大学というのは何のためであるか。帝国とは、総合の別名なのか、それとも、国立の意義なのか明らかでない。それも、ユニヴァーシティとカレッジと区別する言葉を造らなかつたうえに、いたずらに大学の語にこだわつたため、奇異な熟語を選んでしまった。殊に分科大学中に文科大学があり、同音で混同しているのを考慮しないなど、五爵の制度(中国古代の制にならって明治十七年(一八八四)制定の公侯伯子男の五段階の爵位)に、同音の公侯を使用しており、目で見るのを先にして、耳で聞く不便を察しなかった。中国では公と侯、分と文と発音を別にしてはいるが、日本では同音で話をする場合不便である。

そのうえ分科の科と学科の科とは性質が異なつているのに各分科大学に若干学科を設け、科の意義を曖昧にする誤りをしてはいる。

更には、旧東京大学に通用した名称を改変して、新体制を標榜するのが急で、その改善の実が伴わないで、往々改悪ともなつてはいる。

旧文学部の政治経済を新法科大学に移したのは、後にいわゆる官僚と呼ばれる者の雰囲気極めて濃厚で、その気分のままに何事も裁断する勢で、圧倒的に決定してしまつた。法律と政治経済とは、親類筋に属して、同一法科に入るべきものであると、官吏中に誰一人疑うものはいなかつた。旧文学部長で新文科大学長となる者は、管轄範囲が甚だしく縮小するのを憂うだけで、何等反対すべき理由を見出さずに、新たに史学科を加えられ慰められたに過ぎない。

もし、官僚の間に自立する力を備へ、官僚気分(その気分のままに何事を裁断する)の永く盛んであつてはならないことを知つていたならば、官僚の後継者を作るよりも、卓見のある紳士を養成する必要を説き、多少なりとも科目を改変したであろう。ともかく、伊藤首相、森文相、渡邊大総長等に齒が立たなかつた。

(続)

# 白河・那須方面探訪記 向山重忠

都をば霞とともに立ちしかど

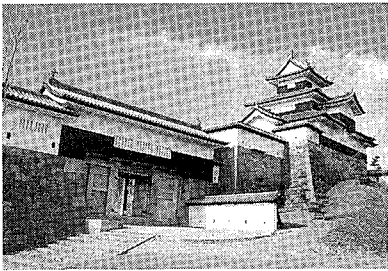
秋風ぞ吹く白河の関

と能因法師の歌に誘われて、白河今市方面をめぐる小田原史談会の史跡めぐりは参加人員十八名、平成六年十一月十七日、時間通りに小田原駅前を七時に出発しました。

厚木バイパスから都内へ、幸い高速路の大渋滞もなく、バスは無事に東北道に乗り一路白河へと向かいました。東北道に乗ってから富田、岡部、瀬戸の三先生から資料が配られ、改めて勉強をし、又、声の美しいガイドさんの「奥の細道」の朗読を聞いているうちに、バスは予定より早く白河インターに到着しました。

## 小峰城

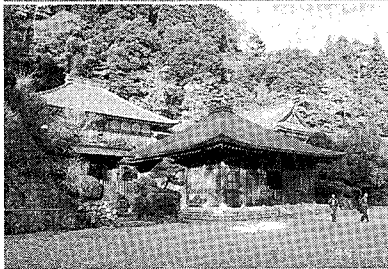
白河の街に入ると間もなく、小高い丘の上に三層櫓の小峰城が見えて



小峰城



白河古関跡



雲巖寺

畔には、桜、楓、松が美しく植えられ、四民共楽の公園、亦日本最初の

来ました。一八六八年戊辰戦争の攻防で落城し、今では石垣と水濠を残すのみでしたが、市制四十年を記念して、平成三年四月、城は再建されたとのことです。小峰城は大へん美しく、見学は一階だけしか出来ませんでした。が、戊辰戦争の折りに受けた弾痕のある板を床板に張り、見るからに歴史の重さを感じさせました。石垣や復元された清水門等を見学し、白河の街が一望出来る本丸跡で、遠く那須連峰を眺めながら一行は小峰城を後にしました。

## 南湖公園

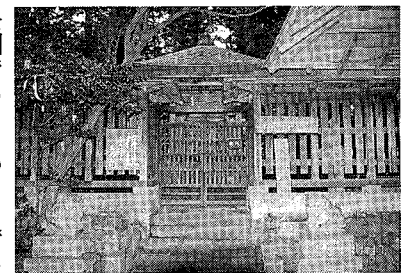
天明飢饉のち、藩主松平定信公が貧民救済と灌漑用水のために築造した、周囲二・五キロの人造湖の湖畔には、桜、楓、松が美しく植えられ、四民共楽の公園、亦日本最初の

公園であるとのことでした。湖畔にて楽しく昼食、近くにある松平定信を祀る南湖神社に参拝しました。

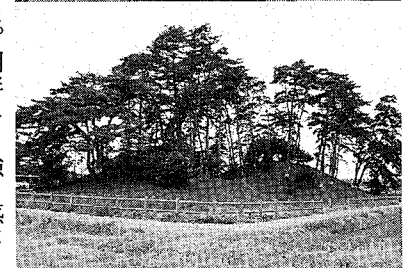
## 白河の関

うっかりすると通り過ぎてしまうかも知れない杣道と呼ばれる旧街道に「白河の関入口」との案内がありました。入るとすぐ右手に白河城主松平定信公の直筆による「古関址」と刻まれた碑が建っていました。七世紀半ば孝徳天皇の頃設置された奥羽三関の一つ、古くから多くの歌に詠まれ、みちのくの入口として名の高い白河の関が此処に在ったのです。

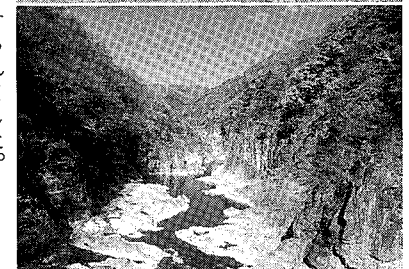
さらに石段を登って白河神社に参拝しました。神社は杉と藤の何百年も経ったと思われる古木に包まれ、右手奥には空壕も見え、古代此処が蝦夷に対する最前線であったことがよく判りました。境内に二位ノ杉、矢立松、母衣かけ楓等源氏にゆかりが深い社でした。余り手が入れてないだけに、かえって古代の雰囲気



笠石神社



下侍塚古墳



竜王峽

バスが南湖公園を去り南下し黒羽町に入りしばらく行くと雲巖寺に到着しました。武茂川に架かる太鼓橋を足もとを注意しつつ渡ると、急な石段、これを登って大きな山門をくぐると目の前にお堂が見えました。大治年間(二二六〜三)の開基と伝えられ、禅宗の日本四大道場の一つに数えられる古刹だと言います。見事に手入れされた木立が一望に眼に入る。その手入れの素晴らしさに感嘆しつつ、この堂の中で僧侶が修行するのかと殊勝に掌を合わせました。このすぐ下を国道が走るのに、さながら深山にある想いです。直線上に並ぶ禅宗様式の伽藍の配置はまことに見事です。なお山門の傍らにはこの地を訪れた芭蕉の句碑もありました。

富田、岡部先生が庫裡の入口に入り、本堂の見学を申し込むと出て来

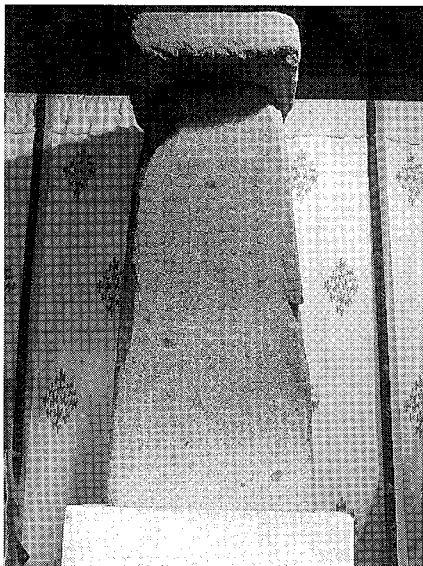
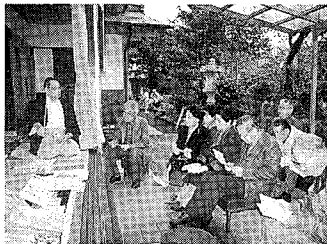
た学僧の申すには「何もお見せするものもありません」との素気ない返事。禅寺だからかと呆れたり驚きもしました。

那須国造碑

古びた小さなお社。茶店のような又お土産屋のような社務所の前で笠石神社伊藤宮司より、名調子で、国造碑が国宝であり笠石神社の御神体である説明を聞く。終わっていいよ一三〇〇余年昔に建てられたと言われる那須国造碑を拝観する。

照明をつけて驚いたことに、そんな古い遺跡とは思えぬ綺麗な御影石に、縦一行に十九文字、横に八行の一五二文字が刻まれています。この碑が果たして一三〇〇余年も経っているのかといささか疑いの気持を持ちました。しかし、先程の宮司の説明で、相当永い期間土中に倒れていたため表面が風化されず、このように文字面がきれいなのかと思いまし

那須国造碑(国宝) ↓  
← 宮司の説明



た。なお、この碑は笠を冠っているもので、笠石神社の縁起なのか文字が読めず、読めないままに、何か一三〇〇年の感慨にひたりました。

下侍塚古墳

湯津上村に入ると、あちこちに塚が見えてきました。古墳のようです。一きわ大きい松の木に囲まれた、全長八十四メートル前方後円墳の下侍塚を見学しました。那須国造碑文の解明のために、この古墳は那須国造の墓ではないかと、かつて上下侍塚を発掘調査したそうですが、碑文の解明にはつながらず再び墳丘に埋め戻されたと言います。さきの国造碑もこの侍塚も徳川光圀とその家臣佐々

介三郎に大変関係があるとの話で驚きました。介さんとはテレビの黄門漫遊記の人物だとばかり信じていたからです。

資料館

下侍塚の前には県立と村立の二つの資料館が並んで在り、私たち一行は県立の方へ入場しました。入ると直ぐ国造碑の複製品が目に入り、那須地方の古代文化の遺品がたくさん展示されています。ことに古代人の生活用品などが大事に保存されているのを見ると、この地の人々の祖先信仰の深さを見る思いがいたしました。小田原にもこのような立派な資料館が欲しいと思いつつ、今宵の旅宿塩原温泉へと直行いたしました。

二宮尊徳翁の墓

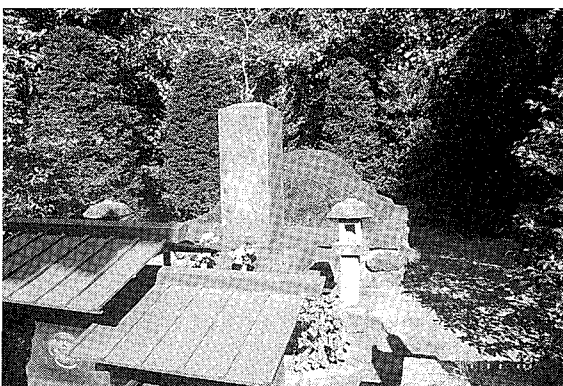
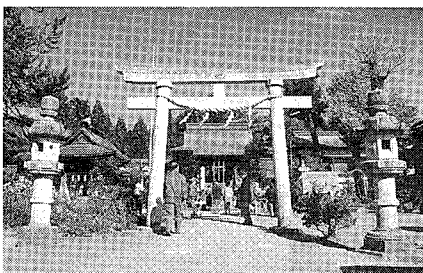
翌朝八時二十分、塩原温泉を発った一行は、竜王峠を経て今市市へ向かいました。此処は二宮尊徳が、幕命によって日光東照宮御神領の農地再建に力を尽くした処で、尊徳は故郷小田原へは帰らず、今市でその苦労の生涯を閉じたのです。尊徳の墓は市内の二宮神社境内に在り「墓は作らず松の木一本を植えよ」との彼の遺言により、墓石もなく小さな盛り塚のみの質素なものでし

た。なお、市内各所の商店には「報徳訓」の文字が見え、尊徳の影響の深かったことが偲ばれました。そして同時に今市市と小田原市とは姉妹都市の盟を結んでいることを思いおこしました。

今市にて昼食を取りました。見た事教えて頂いた事を頭に入れて名物タマリ漬を忘れずに買いました。帰りのバスに乗りました。バスは宇都宮バイパスより東北道に入り、全員元気で予定より早く小田原に到着しました。

勉強した事が多く参加して本当によかったと思いつつ家路につきました。

なお、写真は、国造碑以外は、瀬戸崎雄先生から提供を受けました。



報徳二宮神社

二宮尊徳翁墓所

バス見学

# “初詣”に参加して

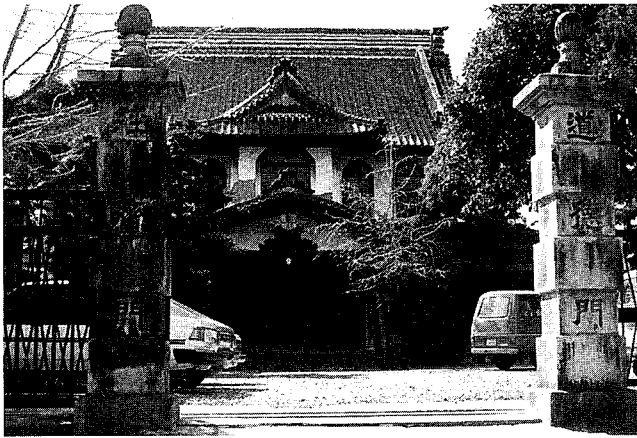
齋藤清一郎

去る一月二十二日の“初詣”に参加し、楽しく有意義な一日を過ごすことができました。事前の下見・豊富な資料準備・車中での詳細な案内説明等役員諸氏のお骨折りに厚く感謝いたします。

ところで、その車中説明の報徳に関する事項の中で若干気付いた事があります

た。座席の位置の関係で私の聞き違いもあるかも知れませんが、他の人はどの様に聞かれたでしょうか。又説明を拜聴しながら、周囲のつぶやきや爆発一緒になった人の言葉などから、報徳とか尊徳とかに対して曲解とか誤認があるように思いました。

そこで、この機会に、こ



大日本報徳社 (掛川市)

二宮尊徳の教えを広め実践するために設けられた全国の報徳の本社。明治44年(1911)設立。正面大講堂は明治36年(1903)建設。現在文化財指定申請中。正門の道徳門、経済門は道徳と経済の調和を説く報徳精神を象徴。

れらを修正していただくとうと、失礼を承知で筆をとりました。

なお、紙数の制約と話し言葉を文章に替えたため、一言一句をそのままというわけにいかなかったことをご了承下さい。

——大日本報徳社に行くところ「やっぱり報徳は宗教だなあ」ということがよく分かると思います——

たしかに明治期には「報徳教」などと呼ばれる人もありましたが、宗教でも政治でもありません。なぜ大日本報徳社に行くとその様に思うのか理解に苦しみます。あそこの大講堂の大玄宮・先聖殿・先農殿などの懸額を見てそう思うのでしょうか。

いまでもにも宗教云々という人はいました。私が否定すると「だって神に祀られているではないか」とほとんどの人が言われました。私はいつも次の様に申し上げております。「西郷隆盛も乃木大将も東郷元帥も将々吉田松陰も神社に祀られています。そういう人々を敬い、その生き方、考え方を大切にし、自分の生活の中に活かし、普及させよ

うと〇〇顕彰会とか△△協会とかいう様に組織を作って活動している人や団体を宗教と言わないですね」と。

もちろん、時と場合によって「尊徳の教えは報徳の哲理に基づいた人の生きる道です。仏教の教えと共通したところもあることはあるが、宗教上あるいは倫理上の教えだけではない、哲学だけでもない、むしろ経済の教えだけでもない、要するに人間の生くべき総合の哲理なんです」と少々時間をかけて申し上げることもあります。

——もし、一木喜徳郎ならかりせば、①小田原に二宮神社はなかったかも ②教科書に尊徳があればほど採り上げられなかったかも ③金次郎像もあんなに普及しなかったかも知れません——

① 神社創建の動きは明治二十一年(一八八〇)頃一度起り、二十四年に本格的になり、二十七年に小田原に報徳二宮神社が創建されました。

② 一木の文部大臣は大正三年(一九一四)から、宮内大臣や大日本報徳社長就任は大正九年です。修

身を国定教科書で教えるようになったのは、明治三十七年(一九〇四)以降で、同四十二年まで三年生で「孝行」「学問」「勤勉」「自営」の四つの徳目です。次いで明治四十三年(一九一〇)から大正六年(一九一七)が巻二で七徳目と増えたが大正七年(一九一八)から昭和八年(一九三三)は三徳目、昭和十六年(一九四一)から二十年までは巻三に「一つぶの米」としてわずかに一徳目だけに減っています。

なお、国定以前の検定時代にも扱っている教科書があり、明治三十二年(一九一九)五月に普及舎発行の『高等小学校修身教典巻一』などは、二十五課目中十六課目も二宮尊徳先生と題名を付けて扱っております。

③ 負薪読書の金次郎像が学校に広く設置されるようになったのは、昭和三年(一九二八)御大典記念の名古屋博覧会に岡崎の石工長坂順治が石像を出品しすぐ買いとられた。以後彼だけでなく岡崎の石材業者はこぞって売り込みに精出した。ほとんど時を同じくして富山県高岡市の平和合金、大阪の慶寺丹長氏らによっても

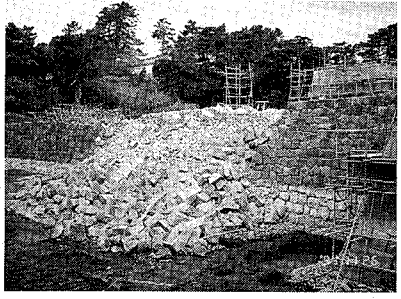
銅像が盛んに製造された。その背景には当時の経済不況と、農山漁村の自力更正運動に報徳精神を活かしていく、そういう動きから、報徳運動が飛躍的に広まった時期であった、ということもあるでしょう。

と見てみると、①②③とも一木の文部大臣や宮内大臣は直接的には関係なさそうです。

大日本報徳社は現在でも常会を定期開催したり、図書を刊行して報徳普及に努めている。小田原にはそれが無い――

### 落穂集

◎小田原市が復元工事を進めていた、小田原城二の丸銅門復元工事中、完成間近の櫓門台石部分が去る十一月二十日夜八時頃、約二十メートルにわたって崩落。この事故で復元工事が大幅に遅れるのは明らかで残念な事である。しかし、事故が夜であったため、工事関係者に死傷者がなかったのは不幸中の幸い。また、事故なく櫓門台石部分の工事が



完了したとしても、関東大震災クラスの地震に遭えば一溜まりもなく崩れ去ることは必定。その際観光客でもいたらばと考えると、今回の事故が教訓としてき

いえいえ、大日本報徳社の活動はそうですが、小田原にもあります。報徳博物館は、財団法人報徳福運社が設置の、報徳関係資料を基礎とする情報収集・研究のための総合センターです。

また、報徳を名乗ってはおりませんが、一円融合会も報徳団体で、事務局を報徳博物館に置き共同で次の様な事業を行なっております。

- ① 資料収集・管理・保全
- ② 資料の公開展示―常設展と年一回の企画展
- ③ 研究・調査
- ④ 普及啓発活動

・毎月第三日曜  
古文書に親しむ会の  
・毎年二月一週間宿泊の  
報徳生活原理講座開催  
⑤ 出版  
このほかに研究者などに  
対する資料提供や助言、研究者・篤行者・福祉事業に対する助成も行なっています。

こうした活動の中から、横浜報徳さくら会や融合サロンという新しい報徳実践のグループも生まれました。以上少々PRめいてしまいましたが、初詣に参加して気付いた点を記させて頂きました。

(報徳博物館長代理)

と活かされるに違いない。

◎本年度から加入を頂いた兵庫県高砂市の沼田晃さんへ『小田原史談』を発送したのが阪神大震災直後の一月十八日の事とて無事届いているかどうか心配で、本会の向山会計会員担当が御見舞かたがた照会のところ、一月三十一日付速達で次のような回答をいただいた(当方二月二日受)。

「兵庫県南部地震による交通網の遮断で、一月二十八日に貴会誌が遅れて到着致しましたので御連絡申し

### 訃報

徳山 義一氏  
(小田原市本町一四一)

昨年十二月二日逝去されました。享年八十五歳

長谷川 繁孝氏  
(小田原市中町二一〇)

去る二月十九日逝去されました。享年八十九歳

神戸英次郎氏  
(小田原市南町三一三)

上げます。何分にも地盤並びに家屋構造、地震の通り道により被害の大小が分かれた様で大変でした。当方は、砂地で地盤等のクッションに恵まれ、壁等のひび割れが若干見られる程度でほととじていますが、余震が今も続き、まだ安心迄にはいけません、何とか生活できますので、幸に思っている次第です」

去る二月二十一日逝去されました。享年八十三歳  
眞壁 敏男氏  
(小田原市南鴨宮一四一三)  
去月二月二十五日逝去されました。享年八十歳  
高井 喜雄氏  
(小田原市栢山三三)  
去る二月二十六日逝去されました。享年九十一歳  
ご冥福をお祈りします。

### 小田原史談会行事

遠州方面初詣 平成七年 一月二十二日(日)雨 七時三十分出発 十七時四十分帰着  
(コース) (小田原駅前) 東名高速) 大井・松田) 富士川S.A) 袋井) 森町・遠州一之宮小国神社) 袋井市・可睡齋: 昼食(門前楽

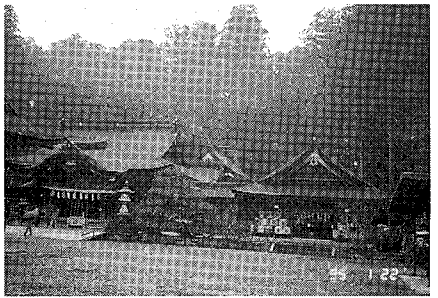
特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店  
 小田原銀座 アオキ画廊  
 熱海 アオキクリニック  
 足柄香粧株式会社  
 飛鳥屋  
 紳士服の **アメリカヤ**  
 (株) アルファ  
 画材 ガクブチ **のうえ**  
 伊勢治書店  
 伊豆箱根トラベル 小田原営業所  
 かまぼこ  
 南足柄関本 おぎの整形外科・歯科  
 税理士 小澤重治事務所  
 小田原魚市場  
 小田原ガス  
 小田原市農業協同組合  
 小田原報徳自動車  
 オートセンター・スギヤマ  
 小田原中央青果  
 オリオン座  
 かまぼこ籠  
 令学苑  
 鐘紡株式会社小田原工場  
 カネボウ化粧品鴨宮工場  
 神尾食品工業  
 木地挽 日下部産業  
 かみやま小児科クリニック  
 興電社  
 小伊勢屋  
 (有) 小松石材店  
 さがみ信用金庫  
 趣味のごぶく さくらい  
 宝飾専門店 Shimano

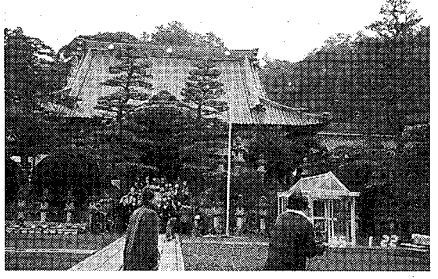
中華料理 昇玉  
 杉山水道工業  
 鈴木 廣太まほこ  
 反寿堂スポーツ  
 大営不動産  
 割烹 富る海  
 茶半家具株式会社  
 ちん里う本店  
 土谷建設株式会社  
 角田ガクフ子店  
 東京電力(株)小田原営業所  
 株式会社 東華軒  
 トーホー建物  
 和菓子 菜の花店  
 八小堂書店  
 八子マサ店  
 平井書店  
 富士写真フィルム  
 株式会社 報徳  
 松坂屋  
 学生専科 丸マルク  
 食器の店 マルサンストア  
 みつゆき設計  
 諸星運輸グループ  
 美濃屋吉兵衛商店  
 みみづく幼稚園  
 ヤオマサ株式会社  
 山口菓子舗  
 ユアサコーポレーション  
 防災器具 優光社

市) 掛川市・掛川城天守閣  
 掛川城御殿  
 大日本報徳社  
 こだわりっぱ (観光案内所)  
 掛川C 焼津C 焼津さかなセンター  
 焼津C 大井・松田C  
 [参加費用] 七千円  
 [参加者] 順不同敬称略  
 富田千春、岡部忠夫、飯田悟郎、向山重忠、和田登・ヤス子、山口一夫、曾我保夫、南陽子、韭山鳩美、田中千恵子、讓原美代

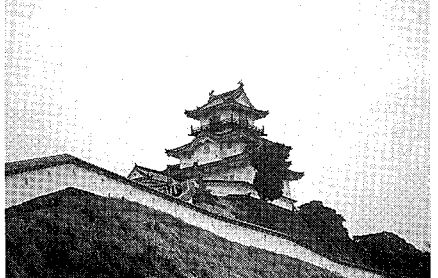
子、形岡タミ子、加藤松枝、額田常子、遠藤茂子、勝保末子、石川タカ子、田口鏡子、内田美枝子、土谷桂子、藤沼キク子、増田任司、角田道・幸子、相原俊夫、佐知子、劍持芳枝、小西マツ、府川宏江、湯川玲子、本多孝三、康子、吉池清、稲子藤江、柏木ミツ、三尋木啓子、小室泰子、鶴井道泰、石黒栄治、斎藤清一郎、和田治助、河本登志、高田千予子、石井艶子。  
 以上四十五名



遠州一之宮 小国神社



可睡齋



掛川城

田口鏡子 撮影

年会費 普通会員三千円  
〇二〇二六四三三六